

ひろき の
広 木 野 遺 跡
こう どの
神 殿 遺 跡 A 地 区



県立学校運動場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1 9 9 7

宮崎県埋蔵文化財センター

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第7集 「広木野遺跡・神殿遺跡A地区」

正誤表

頁	行	誤 (下線部・矢印部)	正
1	下から3行	主管兼埋蔵文化財係長	主幹兼埋蔵文化財係長
2	11行	主管兼埋蔵文化財第1係長	主幹兼埋蔵文化財第1係長
5	下から3行	完全名プラン	完全なプラン
45	左下図		

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第7集

ひろきの
広木野遺跡
こうどの
神殿遺跡 A 地区

県立学校運動場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1997

宮崎県埋蔵文化財センター

序

日頃より本県の埋蔵文化財の保護・活用につきましてはご協力をいただき感謝申し上げます。

宮崎県教育委員会では県立五ヶ瀬中学校高等学校の建設工事、県立高千穂高等学校のグラウンド整備工事を行いました。計画地内に埋蔵文化財が所在することから平成4年度に五ヶ瀬中学校高等学校の広木野遺跡、平成6年度に高千穂高等学校の神殿遺跡の発掘調査を実施しました。本書はその発掘調査報告書であります。

調査の結果、広木野遺跡では古墳時代の住居跡、神殿遺跡では弥生時代と奈良時代の住居跡を検出し、西臼杵地方の当該期の歴史を考えるうえで新たな資料を加えることができました。

本書が学術資料としてあるいは学校教育や生涯学習の資料として広く活用され、埋蔵文化財の理解をふかめるための一助となることを期待します。

なお、調査に際し、ご協力いただきました関係機関をはじめ発掘作業に従事していただいた地元の皆様に対しまして厚くお礼申し上げます。

平成9年3月

宮崎県埋蔵文化財センター
所長 藤本 健一

例 言

- 1 本書は県立学校運動場整備事業に伴い、平成4年9月21日から10月27日にかけて調査を行った広木野遺跡と、平成6年5月23日から平成6年9月16日にかけて調査を行った神殿遺跡A地区の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査にあたっては五ヶ瀬町教育委員会、高千穂町教育委員会および地元の方々の協力を得た。
- 3 出土した鏡の分析は宮崎県工業試験場に依頼した。
- 4 空中写真は(株)スカイサーベイに、種子の同定は(株)古環境研究所に委託した。
- 5 本書に使用した図面は、国土地理院発行の5万分の1図を、そして学校施設課作成の地形図を使用した。
- 6 本書の執筆は第Ⅰ章Ⅰを飯田と谷口武範が、第Ⅱ章・第Ⅲ章を飯田が、第Ⅳ章を戸高が行い、編集は飯田が行った。
- 7 現地の図面・写真は各担当者が補助員の協力を得て作成した。
- 8 遺物および遺構の実測図は宮崎県埋蔵文化財センターに保管している。
- 9 遺物復元整理・実測・製図は各担当者の他、埋蔵文化財センターの整理作業員の協力を得て行った。
- 10 本書では、遺構の種別に次の略号を用いている。
 竪穴住居…SA 土坑…SC 不明遺構…SZ

本文目次

第I章 調査にいたる経緯

第1節 経緯	1
第2節 調査組織	1

第II章 遺跡の環境

第III章 広木野遺跡

第1節 調査の概要	5
第2節 遺構・遺物	5
第3節 小結	5
付 編 五ヶ瀬町広木野遺跡における自然科学分析(古環境研究所)	14

第IV章 神殿遺跡A地区

第1節 はじめに	16
第2節 調査の概要	18
第3節 弥生時代の遺構と遺物	21
第4節 歴史時代の遺構と遺物	41
第5節 時期不明の遺構と遺物	49
第6節 おわりに	54

挿 図 目 次

第1図 遺跡分布図	4	第19図 神殿遺跡 SA5 遺構・出土遺物実測図	34
第2図 広木野遺跡周辺図	6	第20図 神殿遺跡 SA7 遺構・出土遺物実測図	35
第3図 広木野遺跡 遺構分布図	7	第21図 神殿遺跡 SA8 遺構	
第4図 広木野遺跡 1号住居跡実測図	8	およびSA7・SA8 出土遺物実測図	36
第5図 広木野遺跡 2号・3号住居跡実測図	9	第22図 神殿遺跡 SA10遺構実測図	37
第6図 広木野遺跡 遺物実測図	10	第23図 神殿遺跡	
第7図 広木野遺跡 遺物実測図	11	SA10・SA11出土遺物実測図	38
第8図 神殿遺跡		第24図 神殿遺跡 SA11遺構実測図	39
調査対象区域および調査区位置図	16	第25図 神殿遺跡 遺構外出土弥生時代の遺物	40
第9図 神殿遺跡 調査区周辺地形図	17	第26図 神殿遺跡 SA6 遺構実測図	43
第10図 神殿遺跡		第27図 神殿遺跡 SA9 遺構実測図	44
トレンチT2土層断面実測図	19	第28図 神殿遺跡	
第11図 神殿遺跡 I区遺構分布図	22	SA6・SA9 出土遺物実測図	45
第12図 神殿遺跡 II区遺構分布図	23	第29図 神殿遺跡 SA9 出土遺物実測図	46
第13図 神殿遺跡 SA2 遺構実測図	28	第30図 神殿遺跡SA9・SC7	
第14図 神殿遺跡 SA2 遺構・埋土断面実測図	29	およびII区出土歴史時代の遺物	47
第15図 神殿遺跡 SA2 出土遺物実測図	30	第31図 神殿遺跡 SA3 遺構実測図	48
第16図 神殿遺跡 SA2 出土遺物実測図	31	第32図 神殿遺跡	
第17図 神殿遺跡		SA3・SZ2・SZ3 出土遺物実測図	51
SA2・SA4 出土遺物実測図	32	第33図 神殿遺跡 SZ2・SZ3 遺構実測図	52
第18図 神殿遺跡 SA4 遺構実測図	33	第34図 神殿遺跡 SC6・SC7 遺構実測図	53

表 目 次

第1表	広木野遺跡	出土土器観察表	9
第2表	神殿遺跡	検出遺構・遺物およびA・B地区報告配分一覧	21
第3表	神殿遺跡	住居跡一覧	24
第4表	神殿遺跡	出土遺物観察表(1)	57
第5表	神殿遺跡	出土遺物観察表(2)	58
第6表	神殿遺跡	出土遺物観察表(3)	59
第7表	神殿遺跡	出土遺物観察表(4)	60
第8表	神殿遺跡	出土遺物観察表(5)	61
第9表	神殿遺跡	出土遺物観察表(6)	62
第10表	神殿遺跡	出土遺物観察表(7)	63

凡 例

第IV章 神殿遺跡A地区 の中で使用した語句・図・記号等については下記のとおりである。

1. 土色名や遺物の色調名は、『新版標準土色帖』の色名に準拠している。
2. 遺構図の方位は磁北である。
3. 土層断面図中、断面出土の遺物については、土器 … p、石 … s と付記している。
4. 遺構図および全体図において、遺構および掘削面の境界ラインや高低は、次のように示している。



5. 遺構図中、竪穴住居跡内の焼土や炭化物の検出状態については、次のように示している。



6. 遺構図中、竪穴住居跡内出土の遺物については、特記すべきもののみ実測図やドットで出土位置を示している。
7. 遺物図中、丹塗り土器については、丹塗り部分を網目のスクリーントーンで示している。

第I章 調査にいたる経緯

第1節 経緯

広木野遺跡

「人間性回復としての森林活用」を理念とするフォレストピア構想の一環として、中学・高等学校を通じて6年間の教育を行う全寮制の学校建設が計画され、主管課である学校施設課より建設予定地内の文化財の照会があった。これを受けて文化課は、平成4年6月に確認調査を実施し、須恵器および土師器等の遺物を検出し、文化財包蔵地であることを確認した。確認調査を基に文化課・学校施設課双方の協議を行い遺跡対象地約1,500㎡の本調査を実施することとなった。発掘調査は平成4年9月21日から10月27日にかけて行った。

神殿遺跡

西白村郡高千穂町は、宮崎県の北西端、熊本県および大分県に接し、神話の町として全国に知られる。その町の中心部に位置する高千穂高校第2グラウンドの造成が宮崎県教育委員会学校施設課により計画され、平成4年5月、建設予定地内の文化財の所在についての照会があった。文化課では、建設予定地内がすでに高千穂高校グラウンド遺跡として周知され、近世墓なども所在しており、平成4年9月、遺跡の状況を確認するために予定地内の確認調査を行い、丘陵上はすでに削平され遺跡は残存しなかったものの、斜面地において遺物等を検出した。その結果をもとに、学校施設課とその取扱について協議をすすめたが、工事施工上、計画変更は困難であることや遺跡が段々畑等の造成であまり良好な状態ではなかったことから、遺跡に影響がおよぶ箇所について、発掘調査を行うこととなった。なお、グラウンド造成と同時に施工する建設省管轄の高千穂バイパス建設に伴う発掘調査についても、延岡工事事務所と協議しあわせて実施した。

発掘調査は平成6年5月23日から平成6年9月16日まで行った。また、報告書については平成7年度に遺物整理、平成8年度に遺物整理および報告書を作成することで合意した。

第2節 調査組織

平成4年度（広木野遺跡現地調査）

調査主体	宮崎県教育委員会	
	教育長	高山 義 孝
	教育次長	宮路 幸 雄
		安田 天 祥
	文化課長	甲斐 教 雄
	◇ 課長補佐	申間 安 園
	◇ 庶務係長	税 田 輝 彦
事務担当者	庶務係主査	巻 庄 次 郎
	◇ 主任主事	横 山 幸 子
	主管兼埋蔵文化財係長	岩 永 哲 夫
	◇ 主査	北 郷 泰 道
	◇ 主事	飯 田 博 之（調査担当）

平成6年度（神殿遺跡A地区）

調査主体	宮崎県教育委員会	
	教育長	田原直廣
	教育次長	中田忠
		八木洋
	文化課長	江崎富治
	◇ 課長補佐	田中雅文
	◇ 庶務係長	高山恵元
事務担当者	庶務係主査	宮越尊
	◇ 主任主事	横山幸子
	主管兼埋蔵文化財第1係長	岩永哲夫
	◇ 主査	谷口武範
	◇ 主任主事	戸高真知子（調査担当）

平成8年度（整理報告）

調査主体	宮崎県埋蔵文化財センター	
	所長	藤本健一
	副所長兼調査第1係長	岩永哲夫
	調査第2係長	北郷泰道
	庶務係長	三石泰博
事務担当者	庶務係主任主事	吉田秀子
	◇	磯貝政伸
	調査第1係主任主事	戸高真知子（担当）
	◇ 主事	飯田博之（担当）

第二章 遺跡の環境

遺跡の立地

五ヶ瀬町と高千穂町は宮崎県の北西部に位置し、北側には祖母・傾山系、西から南には阿蘇外輪山の山麓、九州山地など山々に囲まれた高地にある。基盤の阿蘇溶結凝灰岩が大小の河川による侵食を受けて急崖を形成している。

広木野遺跡は、南に向けて緩やかに下る斜面に位置しており、標高は約530m。遺跡の南側には渓谷をなす川が流れている。神殿遺跡A地区は、二つの尾根とその間の谷地形に立地しており、南に向かって緩やかに下っている。標高は約300～320mである。西方約250mには五ヶ瀬川が南流しており、谷を隔てて南側丘陵上には高千穂神社がある。

周辺の遺跡

今回の調査で広木野遺跡は古墳時代後期の集落跡が、神殿遺跡A地区は弥生後期・古代の集落が検出された。五ヶ瀬川上流域の集落例は、高千穂町で平成元年に調査された宮ノ前第2遺跡と、平成4年に調査が行われた岩戸五ヶ村遺跡、平成7年度に南平第3遺跡が、そして平成8年に調査された神殿遺跡C地区がある。

宮ノ前第2遺跡は、神殿遺跡A地区の北側にあり、高千穂バイパス建設事業に伴い平成元年4月から平成2年3月にかけて調査が行われ、弥生後期～終末にかけての住居跡7軒、古墳時代初頭～後期の住居跡8軒が検出されている。弥生の住居跡はすべて方形・長方形プランで、柱穴は2本柱・4本柱である。このうち2本柱の住居跡は、床面積26～35㎡の中規模タイプで、4本柱の住居は28～56.2㎡の大型が多いと報告されている。⁽¹⁾

高千穂バイパス事業に伴う調査は増加してきており、今回報告する神殿遺跡A地区、そして隣接する神殿遺跡C地区、南平第3遺跡で集落跡が検出されている。

神殿遺跡A地区の西側に隣接する神殿遺跡C地区は、平成8年の6月から10月にかけて調査が行われ、尾根状の斜面に古墳時代初頭の住居跡3軒が検出されている。住居跡は方形プランで柱穴は2本と4本である。⁽²⁾

高千穂町押方の南平第3遺跡は、平成7年の5月から10月にかけて調査が行われ、住居跡26軒を検出している。プランはすべて方形で柱穴は2本と4本である。⁽³⁾

平成4年に温泉開発事業に伴い調査が行われた岩戸五ヶ村遺跡は、南に向かう斜面に弥生後期の方形プランの住居跡が2軒検出されている。⁽⁴⁾

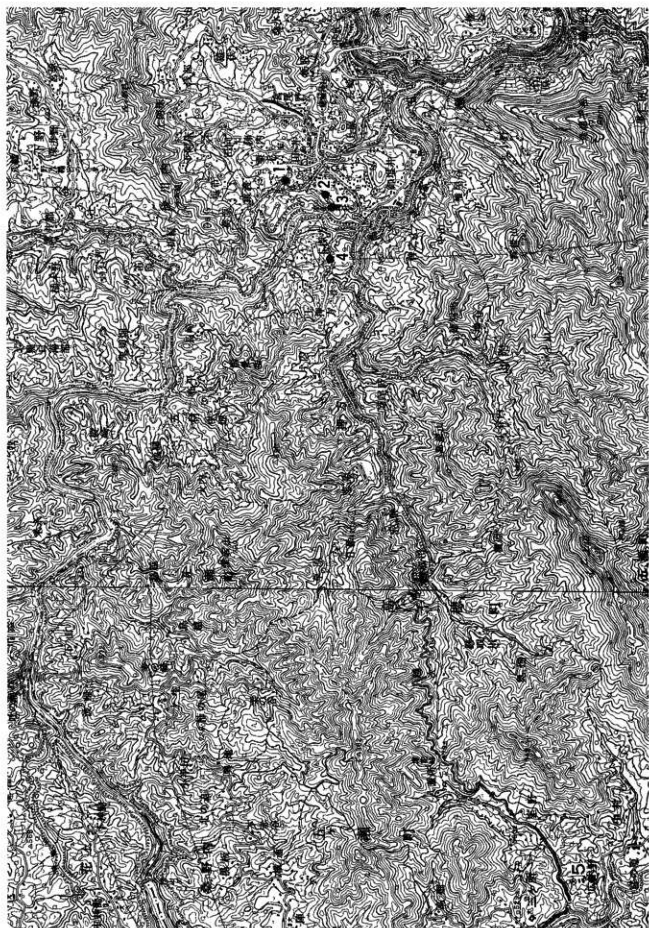
注

(1)国道218号線高千穂バイパス建設関係発掘調査報告書「吾平原第2遺跡・宮ノ前第2遺跡・城ノ平遺跡」1993宮崎県教育委員会

(2)宮崎県教育委員会による調査

(3)宮崎県教育委員会による調査

(4)戸高眞知子「宮崎考古学会第27回発表要旨」



1. 宮の前第2遺跡 2. 神殿遺跡A地区 3. 神殿遺跡C地区
 4. 南平第3遺跡 5. 広木野遺跡

第1図 遺跡分布図 (1/50000)

第三章 広木野遺跡

第1節 調査の概要

本遺跡は南東に向けて緩やかに下る標高約580mの斜面に位置する。周囲は高千穂高等学校五ヶ瀬分校や鶏舎等の造成により、旧地形はほとんど残っていない。

調査は6月に行った確認調査で、須恵器等の遺物が出土した地点の約800㎡を対象地として作業を開始した。黄褐色土（アカホヤ火山灰層の二次堆積）が厚く堆積しており、遺構の検出は難航したが、調査後半に古墳時代の竪穴住居跡F3軒を検出した。調査区の周囲は削平を受けていたが、古墳時代の集落が展開していたと考えられる。

第2節 遺構・遺物

調査区は黄褐色土層（アカホヤ火山灰層の二次堆積）が厚く、遺構の検出が難しかったがアカホヤ層まで掘り下げた段階で確認できた。遺物は黄褐色土層の上の褐色土層で出土している。

1号竪穴住居跡

調査区の南側で確認され、削平により約2/3程度が残存していた。プランは方形と考えられ、柱穴は1本だけ確認している。床面のほぼ中央部に埋壔が設置され、西側の隅から炭化物と焼土が検出された。埋壔は径約20cmで周辺には焼土と炭化物がみられる。壔の周囲は固く焼きしまっている。

遺物は、須恵器・土師器・鉄器等が出土している。須恵器は坏壺・坏身・提瓶・が、土師器は壔・壺等が出土している。

2号竪穴住居跡

調査区北側で検出し、プランは一部しか残っていないが、方形を基調とするタイプと考えられる。検出面から床面までの高さは、約50～55cmである。遺物は須恵器・土師器・刀子が出土している。

3号竪穴住居跡

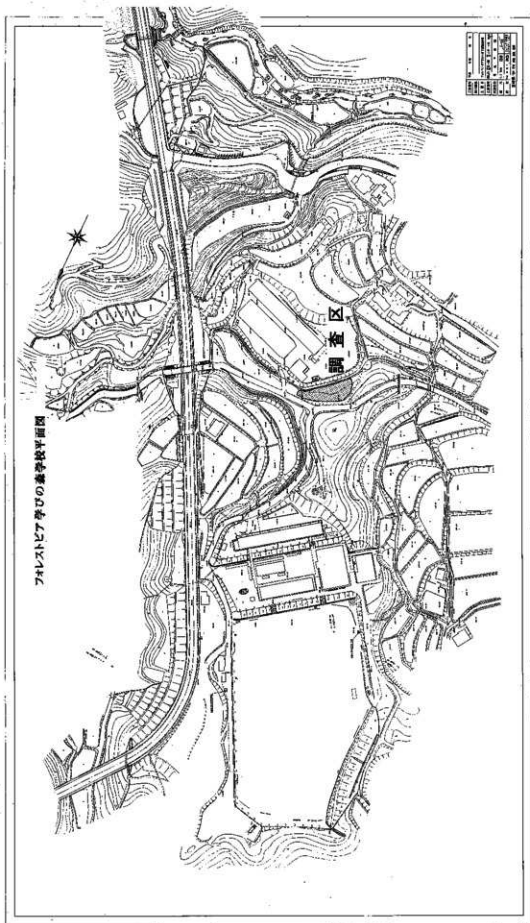
本住居跡もプランの一部しか残っていないが平面プランは方形であると考えられる。検出面から床面までの高さは約60～65cmと考えられる。遺物は須恵器の壔の胴部片と口縁部片が、土師器は壔・壺・坏等が出土している。

遺構外出土の遺物

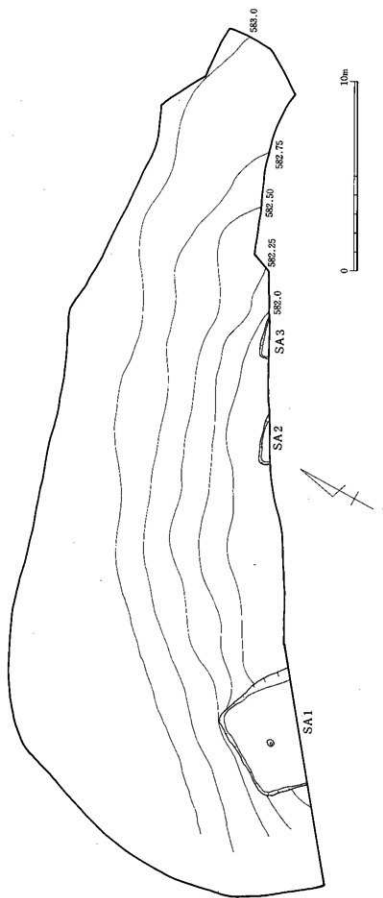
須恵器・土師器が二次アカホヤ層の上の褐色土層で出土している。須恵器は坏身・壺が土師器は壔・壺等が出土している。

第3節 小 結

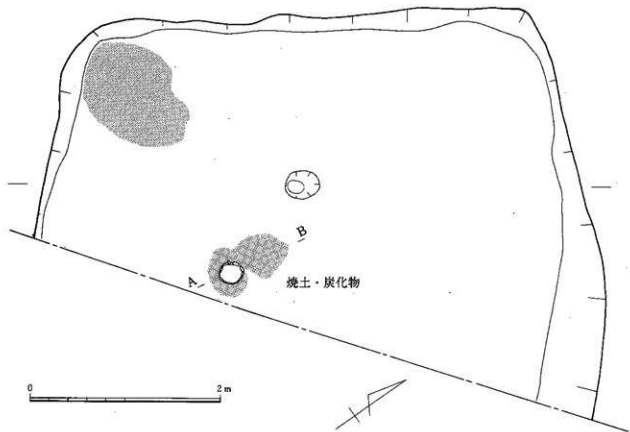
本遺跡の調査では、住居跡が3軒検出できたが、完全名プランを検出はできなかった。1号住居跡は埋壔を伴ったタイプの2本柱で、6世紀後半の時期が考えられる。五ヶ瀬川上流地域でも近年集落遺跡の調査例が増加してきており、埋壔を伴う住居跡の検出例は増えていくであろう。



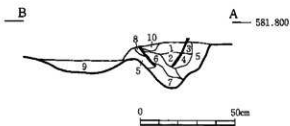
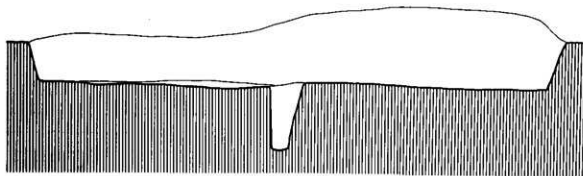
第2図 広木野遺跡遺跡周辺図 (1:1500)



第3図 広木野遺跡遺構分布図(1:200)

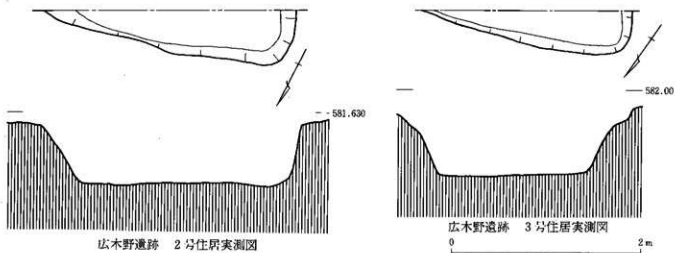


— 582.700



- 1 褐色軟質土（焼土が少量混入）
- 2 黒褐色軟質土（炭化物が少量混入）
- 3 焼土塊
- 4 やや固くしまった明褐色土（焼土・炭が少量混入）
- 5 ややしめた暗褐色土（焼土・炭の混入が多い）
- 6 褐色軟質土（焼土・炭の混入が多い）
- 7 暗褐色土にアカホヤ粒が少量混入（焼土を微量含む）
- 8 焼土塊
- 9 暗褐色土にアカホヤ粒が少量混入（焼土を微量含む）
- 10 褐色軟質土

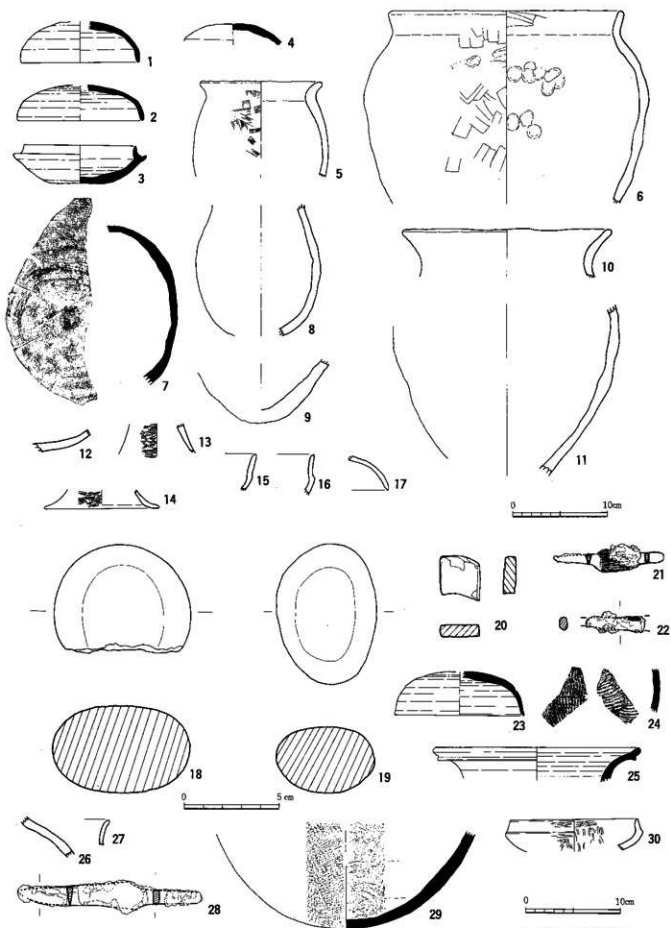
第4図 広木野遺跡1号住居跡実測図（1/40）



第5図 2号・3号住居跡実測図

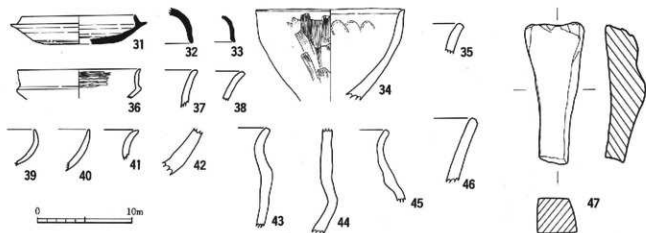
第1表 広木野遺跡 出土土器観察表

番号	出土遺構	種別	器種	調査				色 相				胎 土	焼成	備 考
				外 面	内 面	外 面	内 面	外 面	内 面					
1	SA1	須恵器	坏蓋	ナデ・ケズリ	ナデ	灰色	灰白色	1~4mmの乳白色粒、2mm以下の灰色を含む	良好	口径12.4cm				
2	SA1	須恵器	坏蓋	ナデ・ケズリ	ナデ	灰黄色	灰白色	1~2mm以下の乳白色・灰色粒を含む	良好	口径13.2cm				
3	SA1	須恵器	坏身	ケズリ・ナデ	ナデ	黄灰色	灰オリーブ	2mm以下の灰黄色・黒色砂粒および1mm以下の灰・乳白色・青色の砂粒を含む	良好	口径11.8cm・器高4.0cm				
4	SA1	須恵器	坏蓋	ナデ	ナデ	灰色	灰白色	3mm以下の乳白色砂粒を含む	良好					
5	SA1	土師器	壺	ハケ目・ナデ	ナデ	にぶい褐色	にぶい褐色	4mm以下の灰白色・3mm以下の灰黄色を含む	良好					
6	SA1	土師器	壺	ハケ目・ナデ	ナデ	褐色	褐色	8mm程度の灰白色粒・6mm程度の茶色3mm以下の白・灰黄色・2mm以下の茶色粒を含む	良好	口径24.9cm				
7	SA1	須恵器	流瓶	カキ目・ナデ	ナデ	灰色	灰色	4mm以下の乳白色を含む	良好					
8	SA1	土師器	壺	ナデ	ナデ	黒褐色	にぶい黄褐色	5.5mm以下の褐色の砂粒・1.5mm以下の1mm以下の乳白色の砂粒を含む	良好					
9	SA1	土師器	壺	ナデ	ナデ	にぶい褐色	褐色	3mm以下の赤褐色・灰色・茶褐色粒、以下の窯跡・1mm以下の半透明砂粒を含む	良好					
10	SA1	土師器	壺	ナデ	ナデ	黒褐色 にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	4mm以下の乳白色・3mm以下の水褐色・1mm以下の半透明粒、4mm以下の雲母を含む	良好					
11	SA1	土師器	壺	ナデ	ナデ	灰褐色	黒褐色	5mm以下の灰色・4mm以下の茶褐色・乳白色を含む	良好					
12	SA1	土師器	高坏	ナデ	ミガキ	褐色	明赤褐色	1mm以下の灰褐色・灰褐色粒を含む	良好					
13	SA1	土師器	高坏	ミガキ	ミガキ	黒褐色 にぶい赤褐色	明赤褐色 灰黄色	黄褐色・灰褐色砂粒を含む	良好					
14	SA1	土師器	高坏	ミガキ	ナデ	にぶい褐色	灰褐色	黄褐色・灰褐色砂粒を含む	良好					
15	SA1	土師器	坏	ナデ	ミガキ	白色・にぶい黄褐色	褐色	白色・灰色・黒色・褐色砂粒を含む	良好					
16	SA1	土師器	坏	ミガキ	ミガキ	褐色	褐色	白色・灰色・茶色・褐色砂粒を含む	良好					
17	SA1	土師器	蓋	ミガキ	ミガキ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	黒色砂粒を含む	良好					
23	SA2	須恵器	坏蓋	ナデ・ケズリ	ナデ	灰色	灰色	きめこまかな砂粒	良好	口径13.8cm・器高4.65cm				
24	SA2	須恵器	壺	平行タテキ	同心円状凸具	灰黄色	灰白色	1mm以下の灰色・黒色粒を含む	良好					
25	SA2	須恵器	壺	ナデ	ナデ	灰色	灰色	きめこまかな砂粒	良好	口径22cm				
26	SA2	土師器	壺	ナデ	ナデ	にぶい褐色	黒褐色	4mm以下の乳白色・半透明砂粒を含む	良好					
27	SA2	土師器	壺	ナデ	ナデ	黒褐色	黒褐色	1mm以下の灰色の砂粒	良好					
29	SA3	須恵器	壺	格子目タテキ	同心円状凸具	灰色	灰白色	4mm以下の灰色粒を含む	良好					
30	SA3	須恵器	坏	ミガキ	ミガキ	にぶい褐色	にぶい褐色	3mm以下の乳白色・黄褐色を少し含む	良好	口径13.3cm				
31	須恵器	坏身	ケズリ・ナデ	ナデ	灰白色	灰白色	1mm以下の灰色の粒、黒色の粒を含む	良好	口径11.8cm					
32	須恵器	坏蓋	ナデ	ナデ	灰黄色	灰黄色	1~2mm以下の乳白色を含む	良好						
33	須恵器	坏蓋	ナデ	ナデ	灰色	灰色	2mm以下の乳白色を含む	良好						
34	土師器	坏身	ハケ目	ナデ	ナデ	にぶい赤褐色	黒褐色	3mm以下の乳白色・4mm程度の灰白色を含む	良好					
35	土師器	壺	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	灰黄色	4mm以下の褐色粒と1mm以下の窯跡の砂粒を含む	良好						
36	土師器	坏	ミガキ	ミガキ	明赤褐色	暗赤褐色	赤褐色粒	良好						
38	土師器	壺	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	暗灰黄色	3mm以下の白・黒・乳白色粒を含む	良好						
39	土師器	坏	ナデ	ナデ	褐色	褐色	褐色砂粒	良好						
40	土師器	坏	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	にぶい褐色	1~2mm程度の雲母・1mm以下の黒・砂粒を含む	良好						
41	土師器	壺	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	褐色	3mm以下の灰白色砂粒と1mm以下の雲母を含む	良好						
42	土師器	壺	ナデ	ナデ	にぶい赤褐色	にぶい褐色	2mm以下の窯跡と1mm以下の透明砂粒 7mm程度の赤褐色・茶褐色粒を含む	良好						
43	土師器	壺	ナデ	ナデ	褐色・黒褐色	褐色・黒褐色	4mm程度の褐色粒と3mm程度の茶褐色粒を含む	良好						
44	土師器	壺	ナデ	ナデ	黒褐色	灰褐色・黒褐色	5mm程度の白灰色粒と1~4mm程度の砂粒と2mm程度の雲母と1mm以下の黒色砂粒を含む	良好						
45	土師器	壺	ナデ	ナデ	暗褐色	明褐色	6mm以下の茶・褐・白色の粒を含む	良好						
46	土師器	壺	ナデ	ナデ	黒褐色	褐色	5mm程度の赤色の砂粒・4mm以下の灰白色と1mm前後の黒色砂粒を含む	良好						



第6圖 広木野遺跡遺物実測図

1～22 1号住居跡
 23～27 2号住居跡
 28～30 3号住居跡

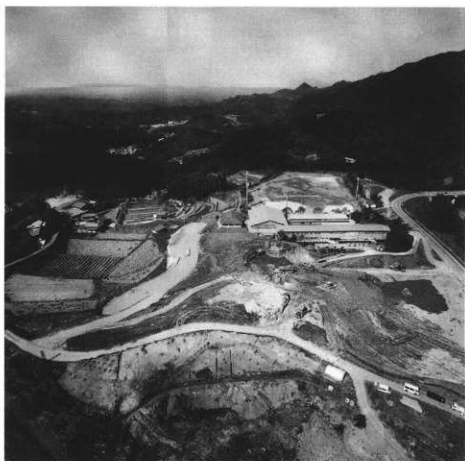


第7図 広木野遺跡遺物実測図



図版
1

遺跡全景



広木野遺跡全景



1号竪穴住居跡



1



2



3



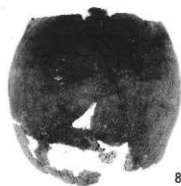
4



6



7



8



11



21



29



23



25



34



30



31



36



45



46

広木野遺跡 出土遺物

I 広木野遺跡出土種実の同定

1. 試料と方法

試料は、古墳時代とされる住居跡内から出土した計6点である。試料は肉眼・ルーペ・実体顕微鏡によって観察して同定した。

2. 結果と所見

同定の結果を以下に示す。

和名	学名	部位	数量
モモ	<i>Prunus persica</i> (Linn.) Batsch.	核	4
オニグルミ	<i>Juglans ailanthifolia</i> . Carr.	核	2

モモ *Prunus persica* (Linn.) Batsch. 核 バラ科

扁平な少し先の尖る楕円形を呈し、表面には特有のシワがあり、側面には縫合部がある。長さ2.0cm、幅1.7cm、厚さ1.4cm。長さ2.0cm、幅1.6cm、厚さ1.4cm。長さ2.1cm、幅1.6cm。長さ1.9cm、幅1.3cm、厚さ1.2cm。

栽培される落葉小高木で、中国原産といわれる。果実は有用な食用である。西南日本を主に出土し、古墳時代の遺跡からは多量に出土する。本試料は最近の金原・粉川(1992)のモモ核の分類のA類にあたり最も古くから日本に存在するタイプである。大きなものから小さいものまで存在し、先の丸いものやや尖るものなど変異がある。

オニグルミ *Juglans ailanthifolia*. Carr. 核

球形を呈し、先が尖り縫合線がめぐる。一つは完形であるが、もう一つは縫合線で割れた半分である。長さ1.7cm、幅1.7cm、長さ1.9cm、幅1.8cm。

落葉高木で北海道から九州の川沿いの湿気の多いところに生える。種子は優秀な食用となる。

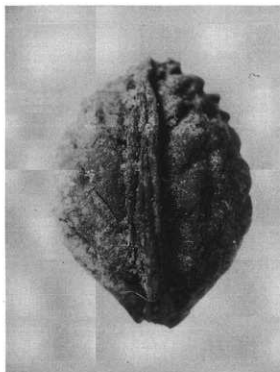
参考文献

金原正明・粉川昭平(1992) モモ核を中心とする古代の有用植物の変遷、日本文化財学会第9回大会研究発表要旨

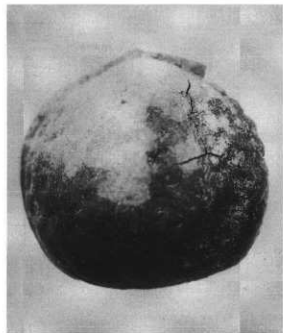
広木野遺跡 種実遺体 I



1 a モモ 核



1 b 同左



2 a オニグルミ



2 b 同左

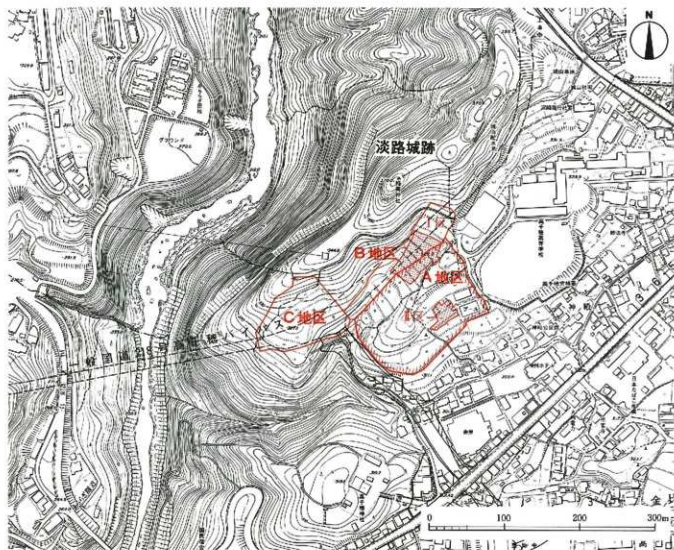
————— 1 cm

第Ⅳ章 神殿遺跡A地区

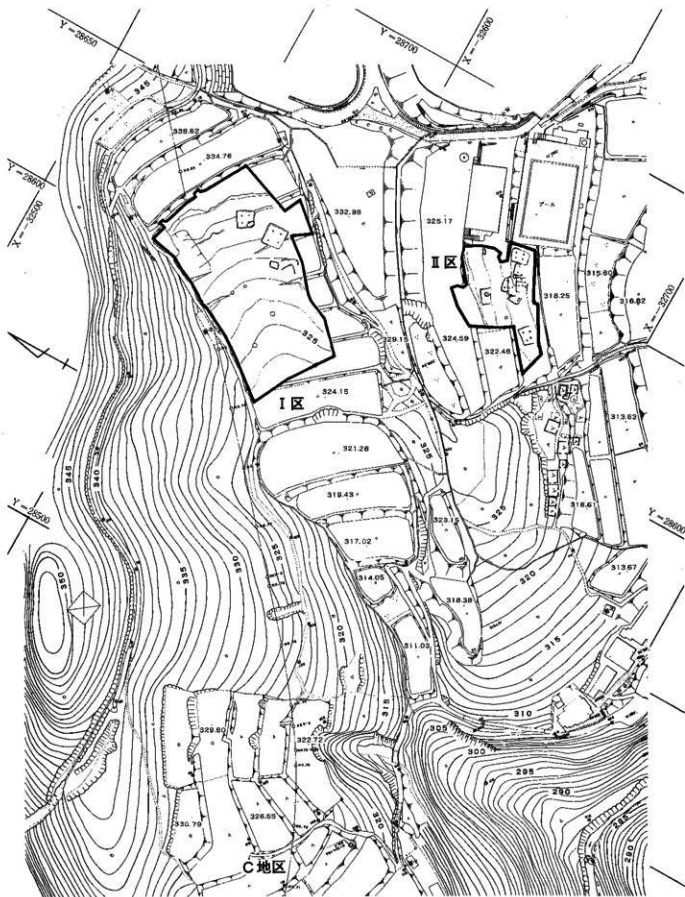
第1節 はじめに (第8・9図)

神殿遺跡(A・B・C地区)は、南西に延びる比較的急峻な丘陵(以下、西側丘陵)および南南西に延びる丘陵(以下、東側丘陵)に位置し、これまでの調査によって、二丘陵中の南面する緩斜面地(標高320~332m)で集落が営まれたことが確認されている。

本書で報告する「県立高千穂高校第二運動場建設用地」のA地区では、東西丘陵に挟まれた谷状の斜面の比較的緩やかな部分(I区)の東南部と、東側丘陵の南側斜面のうち最も造成による削平の度合いが低い部分(II区)について調査を実施した。第I章で述べたように、この調査と併行して、I区で西に隣接する「国道218号線 高千穂バイパス建設用地」のB地区についても調査を行っている。調査原因が異なる両地区の調査結果については個別に報告せざるを得ないが、遺跡としては一体のものである。そのため、遺跡全体の内容について言及するには、A地区のみならず、B地区、さらには西側丘陵先端の南側斜面地のC地区(第II章参照)それぞれの調査結果(平成10年度報告予定)を合わせて検討すべきことを、はじめに記しておく。



第8図 神殿遺跡 調査対象区域および調査区位置図 (1:5,000)



第9図 神代遺跡 調査区周辺地形図 (1:1,250)

なお、西側丘陵上には中世の山城「淡路城」跡があり、県文化課と高千穂町教育委員会合同の縄張り調査によって構造の概要が知られている。すなわち、最頂部を主郭として周囲を削り込み、小口風の段を設けており、丘陵傾斜方向の南西部には段差のある平坦部を造りだして曲輪としている。堀といえるほどの深い掘り込みはない。ただし、本格的な発掘調査を経ていないため、曲輪の段差については確かに当初のものか、若干の疑問もあるようである。

第2節 調査の概要

調査区および調査面の設定

調査は、まず試掘調査の結果をもとに、遺構存在の可能性が最も高い「遺物を比較的多く包含するとともに原地形の最も緩やかな範囲」を優先的に選んで調査区を設定し、その調査成果の如何によって調査区の拡張を検討することにした。

I区の調査に際しては、水田床土を重機で除去した後、まず随所に土層確認のトレンチを設定し、土層の堆積状態を確認した。I区調査範囲設定後、さらに、上部の棚田二面についても包含層の状態と遺構検出の可能性の有無を調べるため、棚田段差と垂直な方向に2本のトレンチを重機で掘削して断面を観察したが、原地形が極めて急斜面で土層の堆積状況が悪く、遺構も見られなかったため、この地区については調査を行わないことにした。対するI区の下部斜面地については、調査開始後、I区調査区内でも、徐々に傾斜が急になる下半部には特筆すべき遺構が極めて少ないと判明したため、原地形と遺構検出の可能性、除去する膨大な土量とその処理、作業員不足などを考慮して、下方への調査区の延長は断念した。

また、東側丘陵先端部のやや緩やかな斜面地においても重機で数ヶ所掘削してみたが、うすい表土の直下に、かなり古い火山灰風化層と見られる灰白色の厚い層が現れ、すでに削平を受けて原地形を留めていないことが確認された。

II区では、試掘調査時の掘り下げが包含層本体にとどいていなかったことから、土層堆積状況と包含層の内容確認のためのトレンチ調査を試みた。その結果、I区と同様、硬い水田床土の下に厚い客土があると予想されたため人力による掘り下げを中止し、それら造成土を重機で除去した後に改めて行うことにした。重機使用に当たっては、高校側から、全国大会を控えた野球部に配慮して投球練習場は壊さないよう要請があったのを受け、まずは、練習場のある中段の棚田跡を避けて差し支えない範囲についてのみ実施することにした。しかし、掘削開始後すぐに、水田床土下で、客土が自然堆積土か判別の難しい、非常に厚いぶい褐色土が現れたことで、掘削の深さと傾斜、すなわち、調査面の位置と人力による掘り下げの深さ・労力、を決定するのに躊躇する事態となった。そこで、下層の状態を知るため下段東部で深く掘削してみたところ、黒褐色の層が現れ、精査により遺構らしい暗褐色の部分（後にSA4として検出）が確認された。また、その掘削による北側垂直断面を精査すると、褐色土中に床面らしい水平な硬化面と、その直上に同一個体の壘片の集積が検出され、住居跡の存在が確認された（後にSA6として検出。壘は第28図94）。この深い掘削によりSA6の東南部を失ったが、結果的には遺構検出面を決定する根拠を得ることができた。この後、下段の数ヶ所にトレンチを設定して人力で掘り下げ、縄文時代後晩期、弥生時代、古代の各時代の遺物が包含されていることが確認された。

当初は、I・II区双方とも棚田造成時に大規模な掘削を受けていると思われたため、予想される調査

の内容は、「斜面地に残存する遺物包含層の調査を主体とし、淡路域関連遺構の検出も期待される。」というものであった。しかし、実際には掘削は遺構を根こそぎ削平するのではなく、むしろ盛土（客土）が予想外に非常に厚い、というものであり、後述する遺構を検出するに至ったことで、改めて、山間部斜面の造成地にある遺跡の試掘調査や調査面設定の難しさ、厚い客土や斜面堆積土の除去にかかる時間と労力の大きさを実感した。

基本層序

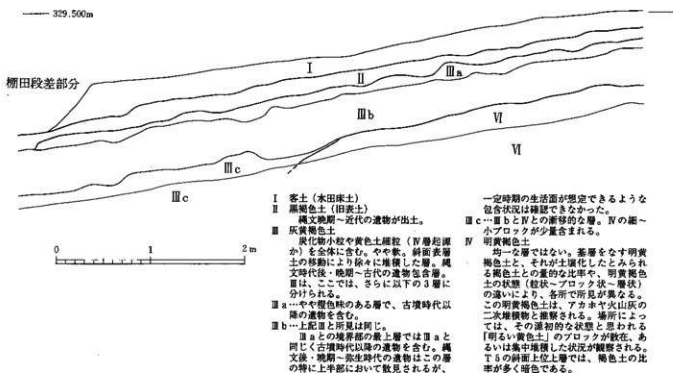
I区の基本層序は第10・14・24図を、II区の基本層序は第17・20図を、それぞれ参照されたい。

I区の遺構検出面は、概ねⅢa層下～Ⅲb層上層であるが、SA1・SA2のある北東部の2面の棚田下の遺構検出面は、削平によりⅣ層が露出あるいは失われている箇所が多い。

i～v層は、前述の調査区設定の項中の「にぶい褐色土」下層に相当し、平面では肉眼による分層が難しい。黒褐色土（vi層）に含まれる黄色のブロック状の火山灰は、テフラ分析を経ていないので確定できないが、肉眼による観察所見やvi層がI区のⅦ層に近似することからも、アカホヤ以前の黄色火山灰としてAT（始良・丹沢火山灰）が妥当であると考えられる。アカホヤ二次堆積層であるI区Ⅱ層と同一と思われる黄色土層は、II区では南西端部に露出しており、SA10の下半にもぐる形で東に向かって低く傾斜している。ただし、この層は、II区中央部においてはvi層の上位にあるべきにもかかわらず確認されていない。やや傾斜の急な斜面では土層形成に至らず、粒状の形で褐色土中に含まれているとも推測される。

調査の経過

A地区の調査は、まずI区の遺構を調査し、II区全体の重機による調査面検出が終了した後は両区に



第10図 神殿遺跡 トレンチT2 土層断面実測図 (1/40)

ついて並行して行った。遺構検出作業は、埋土と地山堆積層との判別の難しさに加え、近年にない水不足の天候に悩まされることになった。乾燥するとますます判別不可になるため、スプリンクラーで節水しながら水を撒き、急場をしのぎながらの作業となった。Ⅱ区では特に遺構の検出が難しく、住居の輪郭を捉えられるようになるまでに日数を要した。それでも、ようやく8軒の住居が確認できたのは大きな成果であった。

I区では、SZ2・3の西側トレンチ下面に焼土や炭化物の広がる面が確認されたことからSA3を検出することになったが、これを最後に調査を終了した。厚いⅢ層中にある遺構は、埋土がよく似るため検出に困難を伴う。トレンチ設定位置の不備により、逸した遺構もあるのでは、という懸念もある。

調査期間中、8月2日には高千穂高校の社会科の授業として、また、9月10日には一般住民を対象に現地説明会を行なった。

検出された遺構と遺物(第2・3表、第11・12図)

神殿遺跡で検出された遺構は第2表のとおり、弥生時代の住居8軒(SA1・2・4・5・7・8・10・11)、奈良時代の住居2軒(SA6・9)、時期不明の竪穴遺構1基(SA3)、土坑9基(SC1~9)、性格・時期ともに不明の遺構3基(SZ1~3)が検出された。

この他、I区では南部でピットが検出されたが、性格は不明である。また、SA1の北側には、地形傾斜に直交する方向にのびる段差と平坦面が検出された。時期は不明で、棚田の大規模な造成直前の遺構と思われる。詳細はB地区報告時に述べたい。

Ⅱ区では、SA11の埋土断面観察時、さらに南側に確認された別の遺構があったが、未調査に終わっている。同様の、遺構検出面下にあつて確認できなかった他の遺構の存在も、遺憾ながら否定できない。

土坑は、I区ではSA1を切る長円形のSC1、小型円形のSC2・5、円形のSC3・4、Ⅱ区では円形のSC6・9、SA9を切る方形(推定)のSC8、長方形のSC7の合計9基が検出されたが、時期を確定できるものはない。

以上のように、神殿遺跡では、当初期待された淡路城関連の遺構は検出されず、この地が居住地であったことを示す住居跡が多く発見された。ここでは、第2表の報告配分にしたがい、A地区検出の遺構についてのみ報告する。また、住居跡の概要は第3表に示した。

神殿遺跡で出土した遺物の時代と内容・報告配分については第2表のとおりで、縄文時代後晩期から中世にかけてのものが出土した。現時点で淡路城に関連する可能性のあるものとしては、中世の鉄鍬2点と龍泉窯系の青磁1点があるのみである。

出土した遺物は、全体に細かい破片状態のものが多く、時代や器種を細分しがたい。とくに、縄文時代後晩期の粗製土器・弥生時代の甕・奈良時代の土師器厚手甕の三者は胎土が酷似していることから、調整や器形が明らかでない類似土器片については、時期判定に迷うものも多く厳密な時期分類はできない。

包含層出土遺物については、本来の位置を離れてすでに斜面上を流動堆積したものと思われるので、厳密に出土位置で分けず、時代ごとに一括して取り扱いたい。

なお、出土石器中に、縄文時代後晩期に多く現れる「扁平打製石斧」があるが、小型ながら同種のものが、本遺跡の弥生時代の住居からも出土している。「石斧」の用途が否かは別として、縄文時代の包含層からの流入遺物とは断定しがたいので弥生時代の遺物として合わせて掲載する。

出土遺物全体の、より詳細な内容については、B地区の調査結果報告時に提示したい。

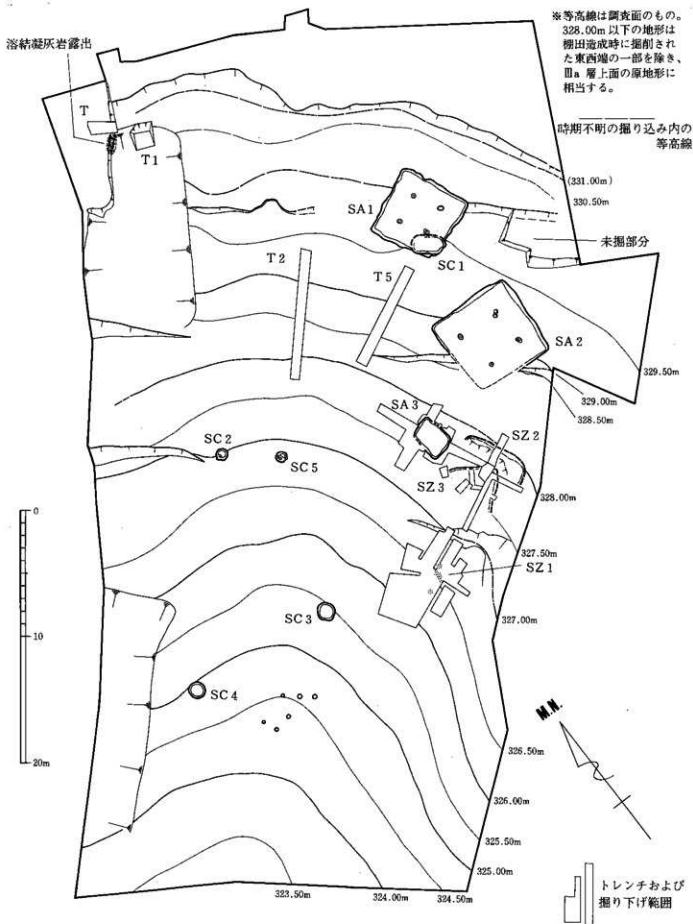
第2表 神殿遺跡 検出遺構・遺物およびA・B地区報告配分一覧

時代	時期	検出遺構	出土遺物	検出地区・量 △…少量			報告配分 (地区)
				I区		II区	
				B地区	A地区	A地区	
縄文時代	後・晩期	包含層	土器：浅鉢など精製土器、深鉢など粗製土器	○		△	B
			石器：石鏃、スクレーパー、石匙、磨製石斧、扁平打製石斧、剥片、チャート原石	○		△	
	晩期末	突帯文土器	○		△		
弥生時代	後期	SA7, SA8, SA11				○	A
	終末	SA10	土器：甕、壺、鉢、高坏、ミニチュア土器、丹塗土器 石器：磨製石包丁、磨製石斧、磨製石鏃、砥石、台石、磨石、扁平打製石斧			○	
	終末～古墳初頭	SA1	鉄器：鉄鏃(SA2)、不明(SA2・SA8)	○			B
		SA2	鏡片(SA10)		○		
	不明	SA4, SA5				○	A
	包含層		土器、石器			○	B
包含層		土器、石器 肥後系甕(黒髪式系)		○	1	1	A
古墳時代	包含層	土師器：布留式土器、丹塗坏 須恵器：坏、甕、罐		○			B
奈良時代	SA6, SA9	土師器：甕、坏 須恵器：坏、坏蓋、高台付坏、壺、甕 鉄器：鉄鏃、棒状、鈎状				○	A
	包含層	土師器、須恵器 須恵器				○	A
古代	包含層	土師器：甕、坏？ 須恵器：坏、坏蓋、高台付坏、壺、甕 須恵器：坏蓋、甕				○	A
			△				B
		布痕土器片				3	A
			1				B
中世	包含層	青磁片(龍泉窯系)	1				B
		鉄鏃	2				
不明	SA3 SZ1~3	土器：甕、弥生甕			○		A
	SC1~5	土器(極少)	○				B
	SC6	岩石塊1(阿蘇溶結凝灰岩)				○	A
	SC7	土師器甕(奈良～平安)				○	
	SC8, SC9					○	
	包含層		土器	○			△
		鉄器	△				

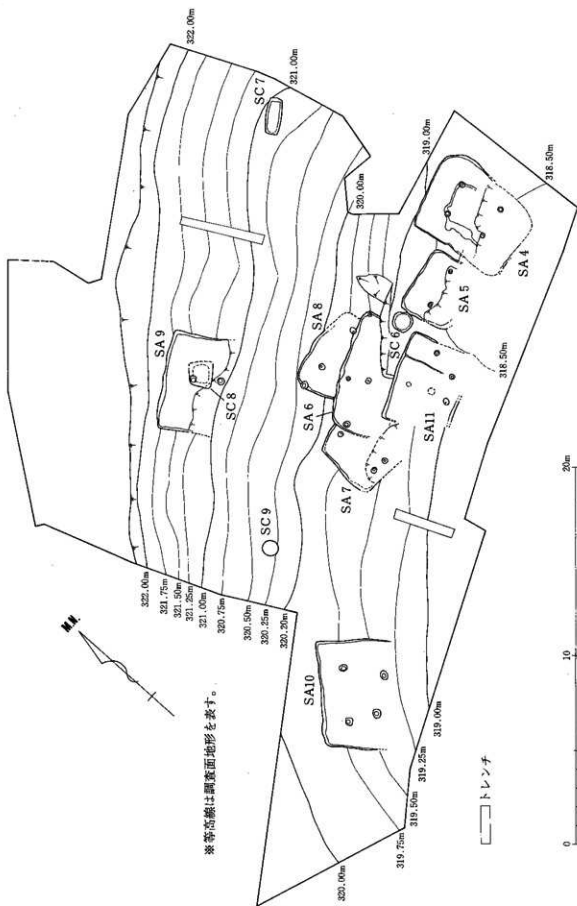
第3節 弥生時代の遺構と遺物

弥生時代の遺構は、堅穴住居跡が8軒検出されており、各住居の規模、出土遺物、特記事項、土器の形態等から判定した時代、などの概要は第3表のとおりである。

I区では、B地区のSA1とともに、SA2が検出されており、2軒とも平面形はほぼ正方形で規模



第11図 神殿遺跡 I区遺構分布図 (1/300)



第12図 神殿遺跡 II区遺構分布図 (1/200)

第3表 神殿遺跡住居跡一覧

※ 計測値…〈 〉 完存しないものの現存値、() 推定値。
主 軸…完存しない住居については、地形傾斜方向。

住居番号	図 番 号 図版番号	時 期	平面形	柱数 (主柱)	規 模 画		出土遺物 (土器は器種のみ)	特 記 事 項
					主軸最大長×最大幅×深さ(釐) (m)	床面積 (㎡)		
(参考として) SA1		弥生時代 終末～ 古墳時代 初葉	方形	4	北東隅 5.84 × 5.92 × (0.91) + a	26.1	壘、タタキ調整壘、竈?	南東柱穴の東側に炭化材や焼土粒(やや確)の広がりが有り。明らかな焼土面はなし。
SA2	第13～17図 図版 6-7-15～8	弥生時代 終末～ 古墳時代 初葉	方形	4	北東隅 (5.94) × (6.96) × (1.19) + a	(41.3) (38.5)	壘、竈、複合口縁壘、 小型壘、鉢、高坏、 丹塗り土器、磨製石 包丁1、磨製石斧1、 磨石1、鉄器3(鉄 線1、鉄形金具?2)	南西部床より上は、欄田造成時の 掘削を受けて失われている。 中央やや東寄りに炭化材・粒の集 中する箇所有り。
SA3	第31-32図 図版 8-15-18	不明 (弥生・ 奈良?)	小型で やや南 北に長 いやや 丸の 長方形	0	北中央 2.94 × 2.12 × (0.87) + a	(4.6)	壘、突帯付壘、 竈又は壘	南西隅に浅いピット、南部壁に接 してやや広く浅い凹部有り。 焼土が北東部に有り。炭化物が集 中あるいは確で広がる箇所が散見 される。
SA4	第17-18図 図版 10-11-17	弥生時代	やや南 北に長 いやや 不整な 方形	4	北西隅 床5.72 × (4.62) × (0.32) (5.80) + a	(23.4) (13.2)	壘、壘、突帯付壘? 台石1、磨石1、 粘板岩片1	南半部の大部分を欠く(貼り床?)。 炭化材、炭化物を多く含む土が中 央西寄りに分布。 焼土は西壁に接した埋土中に有り。 柱穴を覆むような段差有り。
SA5	第19図 図版 10-11-17	弥生時代	隅丸の 方形	2	(3.01) × (3.76) × (0.38) + a	(9.2) (4.9)	壘、壘	南半部の大部分を欠く(貼り床?)。 炭化物や焼土粒の集中部分が散々 所あるが、いずれも埋土中。 床面中央南で赤土顔料出土
SA6	第26-28図 図版 12-13-18	奈良時代	方形?	不明	北西隅 (3.64) × (6.36) × (0.43) + a	(12.6)	土部器(壘、丹塗環壘) 須恵器(坏、高台付坏、 壘、壘) 鉄器3(棒状2、鎌身 1、鉄鐮?1)	掘削により半分以上失っているの で全容不明。 床面はやや南に下がる。 中央西寄りに焼土面有り。
SA7	第20-21図 図版12-17	弥生時代 後期前半	不整な 方形～ 長方形?	2	北 (3.80) × (3.00) × (0.35) + a 4.70	(7.2)	壘、突帯付壘、ミニ チュア壘?	SA6に切られている。 東壁位置不明。 中央に焼土粒集中箇所
SA8	第21図 図版12-17	弥生時代 後期前半	不整な 方形?	不明	北西隅 (2.34) × (4.06) × (0.43) + a (4.68)	(6.1)	壘、突帯付壘・壘? 鉄器(器種不明)1	南半をSA6に切られている。東北 部平面形は推定したが、不明。図 中破線は埋土にじみによる推定。 埋土中央西寄りに焼土粒集中箇 所有り。
SA9	第27-30図 図版13-18	奈良時代 (～平家?)	方形	2	北 (2.90) × (5.20) × (0.49) + a (4.34)	(21.6) (11.5)	土部器(坏、壘) 須恵器(坏壘、坏、 高台付坏、壘、壘) 布敷土器2、鉄器2 (鈎状1、棒状1)	検出面までの掘削により南半を失っ ている。 床面はやや南に下がる。 北側柱穴上部はSC8に切られてい る。
SA10	第22-23図 図版 14-17-18	弥生時代 終末?	方形	4	北 (3.80) × 5.86 × (0.52) + a	(19.8)	タタキ調整壘、突帯 付壘、工字突帯付壘、 壘、突帯付壘、扁平打 製石斧1、磨製石 1、粘板岩石1 鏡片1(床面直上)	検出面までの掘削により、南側を失 っている。 床面やや硬化。 床面上で南側柱穴間に焼土面があ る。
SA11	第23-24図 図版12-17	弥生時代 後期後半	長方形	2? 検出で きず	北中央 3.66 × (4.34) × 0.65 + a (4.72)	(15.5)	壘、突帯付壘、壘、 高坏 磨石1 扁平打製石斧1	柱穴は断面観察により2本想定し たが、積層を経ても検出できず。 東側段差は性格不明。粘土の掘り 込みの可能性も。

も類似する。また、性格・時期ともに不明のS Z 2・3についても弥生時代の住居の可能性を否定できない。一方、Ⅱ区では6軒の住居跡が検出されたが、その多くは検出面設定の都合によりすでに遺構南半を失っている。また、SA10を除き、床面に硬化面や炉と断定できる焼土面を持つものがない。Ⅱ区の住居の分布を見ると、南東部にとくに集中しているが、これは、この地点が最も地形の傾斜が緩やかで居住に適したためではないかと推察される。

弥生時代の遺物は、住居内及び包含層より出土している。掲載した遺物個々の所見については遺物観察表(第4～7・10表)を参照されたい。また、それらの写真は、一部ではあるが、図版15～17に掲載している。土器は小破片が多いため、編年資料として用い得るほど全体の器形が復元できるものは極めて少ない。胎土を見ると、当地方の土器に多く見られる、角閃石などの鉱物粒を多く含む粗質の土器とともに、平野部で出土するものと近似する、水成粘土とみられる精良な粘土に川砂を混入した土器も散見される(胎土の分類については第4表参照)。

SA 2 (第13～17図、図版6・7・15～18)

SA 2は、Ⅰ区の東側丘陵根幹部寄りの位置に立地し、ほぼ同時期とみられるSA 1と隣接する。棚田造成時に失われた南東部を除き、遺構の残存は非常に良好で、北東隅では検出面からの深さが1.19mも有り、住居本来の規模にかなり近いのではないかと推察される。床面には、継続使用する「炉」の存在と直接結びつけられるような火熱を受けた痕跡はない。住居に伴わない焼土は、住居廃棄後すぐに堆積したとみられる埋土第3層(第14図)の西端部上面に堆積した埋土第4層中に粒状で観察された。西端部床面下のトレンチ断面では、貼床土の第7・8層が確認されたが、貼り床以前の掘り込みを検出することができなかった。貼り床が地形の傾斜に沿うものか全面に及ぶものかは確認できなかった。

遺物は、床面直上では、わずかな土器片(第15図2・3・7・13)と磨製石斧1点(35)が出土したのみで、埋土中(上層から床面近くまで)より600点余りの土器片、石包丁1点(34)、磨石1点(36)、鉄鏃1点(37)、木質部に打ち込まれた用途不明の鋳形の鉄器2点(38・39)などが出土している。埋土の堆積状況から、住居は比較的短期間のうちに埋没したと推察され、埋土中の遺物もSA 2と大差ない時期のものであろう。2の壘は、住居南東部の床面直上から埋土中位のレベルで出土した破片十数点が接合している。この2と14の壘は、それぞれSA 3出土土器片1点とも接合しているが、それらがSA 3の埋土中または検出面上面の、どちらのものか明確でないので、接合関係と二遺構間の時期的関係については言及しがたい。15は底面に葉状の植物の圧痕が集中し、その直ぐ上位には布の圧痕が観察される(図版16)。これには、離型材のような用途も想定され、衣生活のみならず、土器製作時の底部成形技法にも関係するものとして注目される。12は、甕頸部片の内面にややいびつな沈線状の凹部があるもので(図版17)、焼成前に故意につけたのか、あるいは偶然に何かの痕跡が付いたのか不明である。丹塗土器は、32・33の他にも図化できなかった破片が約20点出土している。出土土器中、胎土について特に注目されるのは23で、大きすぎるとも言える岩片を多く含む点で特異である(図版16)。

SA 4 (第17・18図、図版10・11・17)

SA 4は、SA 5とともにⅡ区の南東端部の黒褐色土vii層面で検出された住居跡である。南半部においては、検出レベルが低く遺構残存状況が悪い上、南半部の埋土が黒褐色土と判別しにくいいため、遺構輪郭はサブトレンチを設定したにもかかわらず、ごく一部で確認できるのみであった。床面南半の落ち込みは、埋土と同様の軟質土を掘り下げていった結果のものだが、軟質土が貼り床の土だったのか、あ

るいは、黒褐色土の上位に地山の堆積層としての軟質土層があったのか、については不明である。遺物は少なく、床面では台石や砥石と共にハケ調整の甕片2点、粘板岩片があるのみで、南西隅部では、落ち込み内の、床面より若干下がったレベルで甕片数点が、また、埋土中より土器片数点が出土している。

SA5 (第19図、図版10・11・17)

SA5は、SA4の西側に隣接した位置にある小型の住居である。南東部は検出時の掘削により失われている。床面南半部は傾斜して落ち込むが、これはSA4のものと同様の原因、または流失によると思われる。遺物は、土器片等が十数点出土したが、床面出土のものはない。落ち込み内より厚手粗製甕片1点が出土している。西壁中央の検出面では、壁面をまたく形で43の壺下半部が出土したが、SA5検出面のⅧ層は当時の生活面ではあり得ないので、43の出土位置については、SA5の遺構内に相当し、埋土中に置かれたものか、あるいはSA5より後の遺構内の底面に相当するものか、そのどちらかであると考えられる。SA5内出土の土器片には43と同一個体のものがなく、ここでは43は遺構外のものとして取り扱いたい。

SA7 (第20・21図、図版12・15)

SA7は、Ⅱ区中央に位置し、東半部をSA6に切られている。埋土と地山層の判別が難しく、随所にサブトレンチを入れ、その断面観察により遺構形状を確認した。SA6との切り合い部分は、はっきりした土色や硬化面の違いが確認できず、しかも両住居の床面レベルが近い位置にあるため、SA7東壁の位置は、東西断面からは、復元できない。SA11北西端の掘削位置までSA7床面が続くとすると、平面形は長方形を呈すると推測される。柱穴は、南北に2基と、南側柱穴の東側にもう1基検出されたが、これにSA6北西端のピットを加えると、これら4柱穴は2本ずつ2列に並ぶ形になるので、このSA6内のピットはSA7のもの可能性がある。そうした場合、2列の間隔は狭すぎるので、柱の立て替えの結果によるものと想定される。住居の東壁位置によっては、主柱穴4本の構造が妥当と思われるが、東部では柱穴が確認できなかった。床面南東部の凹部は、軟質の部分掘り下げたもので、ここに落ち込む形で出土した遺物も数点あるので、床面の流失や、貼り床のような人為的な掘り込みによるものと思われる。遺物は、土器片を中心に約80点出土しており、頸部に断面三角形の突帯のめぐる壺45・47や、その胴部片も見られる。

SA8 (第21図、図版12・17)

SA8は、Ⅱ区中央部に位置し、SA6に切られている。北東部の形状が埋土と地山層の判別が難しいため明確でないが、全体の復元平面形は方形を呈すると推定される。

柱穴については、東西方向に2基検出されたピットが主柱穴に当たるのか否か、4本柱の構造か、不明である。この2基の他、同一ライン上に並ぶピットが西壁に接する位置にあるが、これが柱穴に付随するものなのか、SA8とは無関係のものか、検出時には確認できなかった。SA6東北隅にも、これと対になり深さも近似するピットがあることから、これらの4穴がSA8に伴うものであれば、SA8北東部の遺構境界復元線も東端ピット位置まで拡張される、という事も考えられる。

遺物は、土器片が十数点で、54のみ床面、他は埋土中から出土している。

SA10 (第22・23図、図版14・17・18)

SA10はⅡ区南西端部に位置する。住居西部は、遺構検出以前に「Ⅱ区調査開始時の土層確認用トレンチ」によって掘り下げられていたが、その際、須恵器小片2点と丹塗り土師器小片が出土したことが

ら、検出当初、住居の時期は古墳時代から古代にかけての間、と予想していた。ところが、完掘直前に床面から鏡片が出土し、住居の時期について再検討が必要となった。

遺物は約40点出土しているが、埋土中のもが多く、床面直上の遺物は北東部の4点のみ(うち2点は63・73)である。土器は小片がほとんどで、器形の復元できるものは少ない。須恵器片は計4点出土したが、出土位置の明らかな2点は、それぞれ検出面より約5cm下・床上約15cmの位置で出土していることから、住居は弥生時代のもので、須恵器出土地点には後世の包含層の落ち込みまたは遺構があったものと推測される。結局、時期については、積極的に決定できる遺物はないものの、弥生時代後期後半以降のものと推定される叩き調整の甕片(59)と鏡片の出土を重視し、ここでは同終末期としている。

鏡片は、床にへばりつくような状態で、文様のある背面を下にして出土した。大きさは、最大幅2.06cm、最大長1.75cmの三角形状で、最大厚は0.15cmである。内行花文の内側に異体字の銘が配されているもので、円弧から復元した鏡の直径は、9cm程度ではないかと推定される。破断面に研磨の痕跡は観察されない。文様内の凹部には、やや桃色味のある土が付着しており、赤色顔料付着の可能性が考えられたことから、県工業試験場に蛍光X線分析を依頼したところ、水銀は検出されなかった。試料が微量のため顔料の同定は難しいが、酸化鉄系の顔料が付着している可能性もある。

SA11(第23・24図、図版12・17)

SA11は、Ⅱ区南部中央にあり、SA6の南側に位置する長方形の住居である。住居の東半部は、SA6東南部と同時に深く掘削されたため、遺構壁面はわずかに残るのみである。一方、西半部はSA6床面下にあり、残存度は良い。埋土断面によると、住居北辺上面レベルが住居掘り込み面に相当するよう見受けられるが、その場合、SA7との遺構の位置や新旧の関係に再考を要することになる。SA11本来の住居上面は、流失や、SA6構築時など後世の削平を受けていることも十分考えられるだろう。

柱穴は、埋土断面観察時に、貼り床と思われる第5層中の2箇所で確認された「上面に硬化面のない、若干軟らかい部分」が、それに相当すると想定されたが、面的には遺構を捉えられなかった。遺構平面図中の破線円形は、埋土断面に対応する柱穴推定位置である。

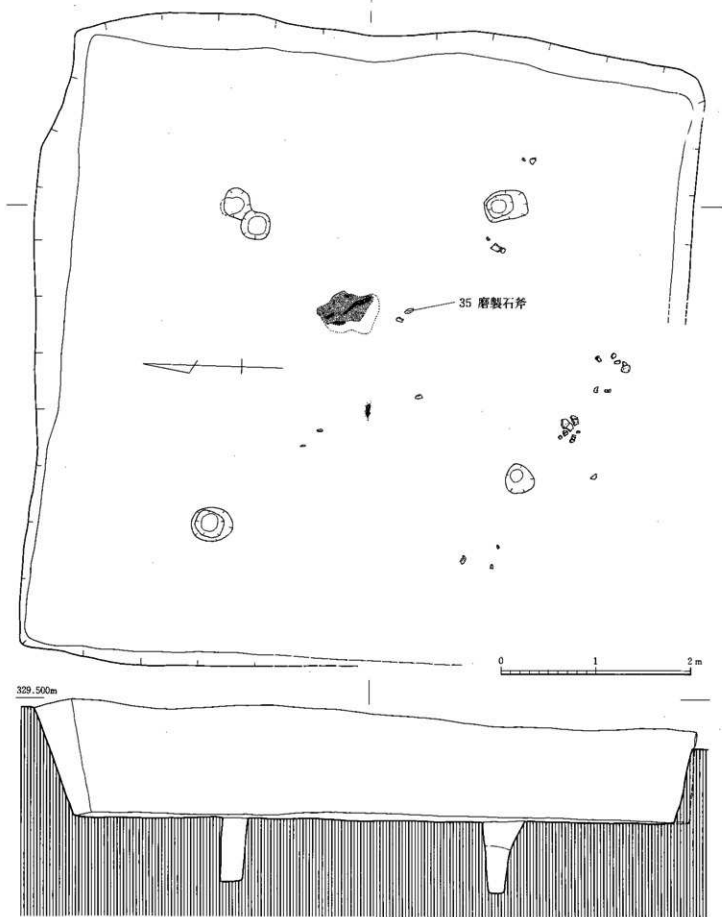
遺構形状を見ると、東側のベッド状の段差が特徴的であるが、これは床面精査時に埋土の色調の違いをもとに掘り上げたものである。しかし、段差のレベル差はわずかなうえ、上段面のレベルはSA11西半床と大差ないので、貼り床の掘り込みに相当する可能性も考えられる。

遺物は、十数点と非常に少ない。さらに床面あるいは床面近くで出土した遺物となるとごくわずかで、図中にドットで示したものは、70の砥石以外いずれも土器小片で、中央部南端の床面直上では64の甕口縁部が出土している。

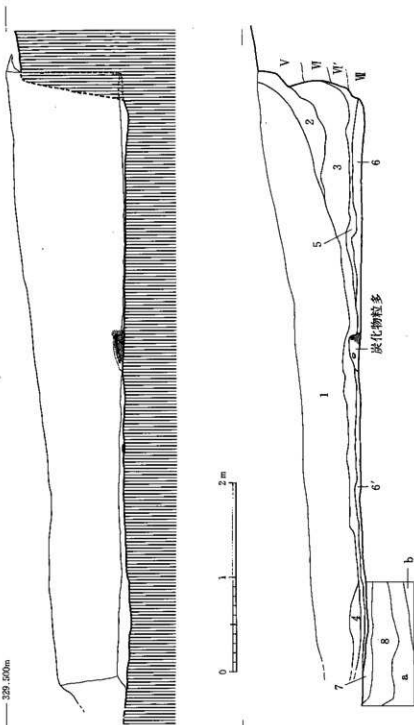
遺構外の遺物(第25図)

遺構に伴わない弥生時代の遺物は、第25図に示したものの他に、SA5西壁上出土の壺43(第19図)、時期不明の遺構SZ2・3、SA3からも出土している(第32図)。

43の胎土は、SA8出土の甕片56と、56と同胎土のSA11出土甕片67に近似している(図版17)。74・84は、口縁部断面形が鋤先状で上げ底の脚台を持つ、いわゆる「肥後系の甕形土器」で、後期前半に位置づけられる。この型式の土器の脚台内面には、しばしば離型材とみられる砂粒が多く付着しているが、84には砂粒ではなく、植物質の短い繊維の圧痕が多く観察される(図版16)。



第13図 神殿遺跡 SA 2 遺構実測図 (1/40)



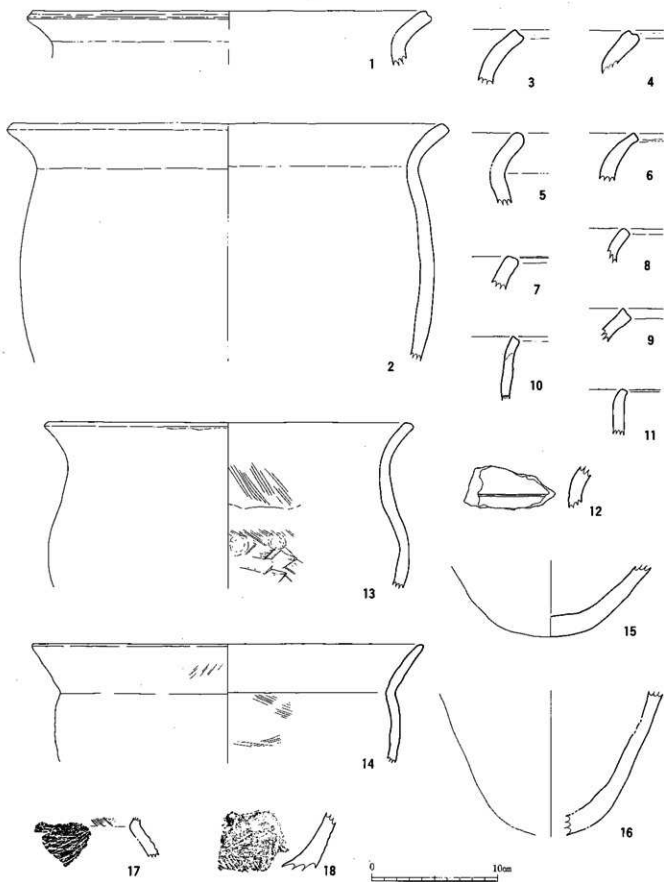
- 1 土壌色 (10YR 5/4) 土壌色はごく少。アコヤ小ブツク (明黄褐色 10YR 6/6, V層土で、純粋なアコヤは少くない) は2層より大きく (0.3-1.2m) 多い。
- 2 土壌色 (10YR 6/4, V層?) のアコヤ小ブツク (0.3-0.5m) を含む。
- 3 土壌色 (10YR 6/4, V層?) のアコヤ小ブツク (0.3-0.5m) を含む。
- 4 土壌色 (10YR 6/4, V層?) のアコヤ小ブツク (0.3-0.5m) を含む。
- 5 土壌色 (10YR 3.5/3) 全体に白色非透明な層を含む。非常に硬いがしなくなり、もろい。

- 6 土壌色 (10YR 3.5/3) 全体に白色非透明な層を含む。非常に硬いがしなくなり、もろい。
- 7 土壌色 (10YR 3.5/3) 全体に白色非透明な層を含む。非常に硬いがしなくなり、もろい。
- 8 土壌色 (10YR 3.5/3) 全体に白色非透明な層を含む。非常に硬いがしなくなり、もろい。
- a 土壌色 (10YR 4/2) 全体、黄色火山灰 (ATか?) のアコヤが入る。
- b 土壌色 (10YR 4/2) 全体、黄色火山灰 (ATか?) のアコヤが入る。

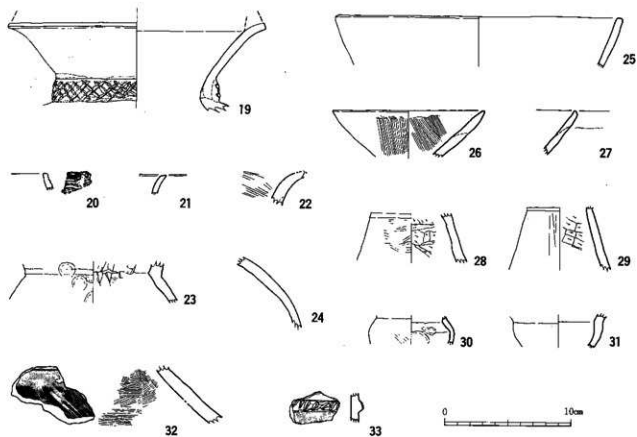
- 6 土壌色 (10YR 3.5/3) 全体に白色非透明な層を含む。非常に硬いがしなくなり、もろい。
- 7 土壌色 (10YR 3.5/3) 全体に白色非透明な層を含む。非常に硬いがしなくなり、もろい。
- 8 土壌色 (10YR 3.5/3) 全体に白色非透明な層を含む。非常に硬いがしなくなり、もろい。
- a 土壌色 (10YR 4/2) 全体、黄色火山灰 (ATか?) のアコヤが入る。
- b 土壌色 (10YR 4/2) 全体、黄色火山灰 (ATか?) のアコヤが入る。

- 6 土壌色 (10YR 3.5/3) 全体に白色非透明な層を含む。非常に硬いがしなくなり、もろい。
- 7 土壌色 (10YR 3.5/3) 全体に白色非透明な層を含む。非常に硬いがしなくなり、もろい。
- 8 土壌色 (10YR 3.5/3) 全体に白色非透明な層を含む。非常に硬いがしなくなり、もろい。
- a 土壌色 (10YR 4/2) 全体、黄色火山灰 (ATか?) のアコヤが入る。
- b 土壌色 (10YR 4/2) 全体、黄色火山灰 (ATか?) のアコヤが入る。

第14図 神殿遺跡 SA 2 遺構・埋土断面実測図 (1/40)



第15图 神殿遺跡 SA 2 出土遺物実測図 (1/3)

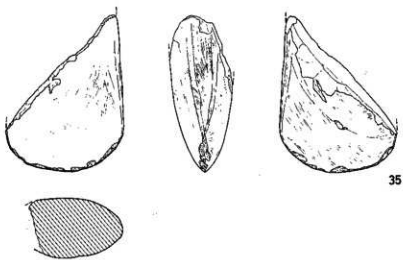


19~33 … 土器(片)

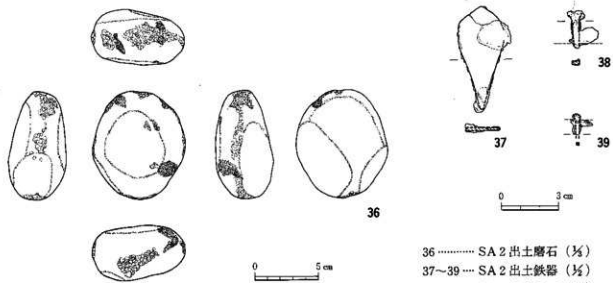


34 … 磨製石包丁(片)

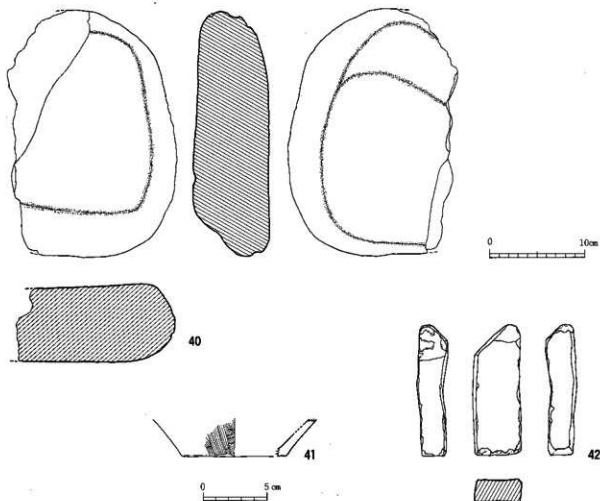
35 … 磨製石斧(片)



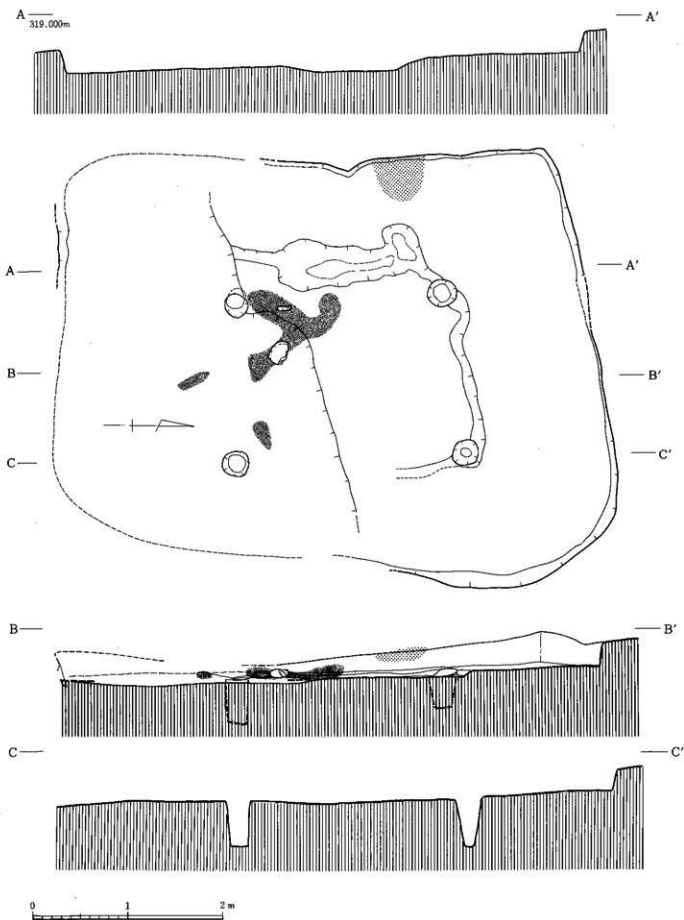
第16図 神殿遺跡 SA2 出土遺物実測図



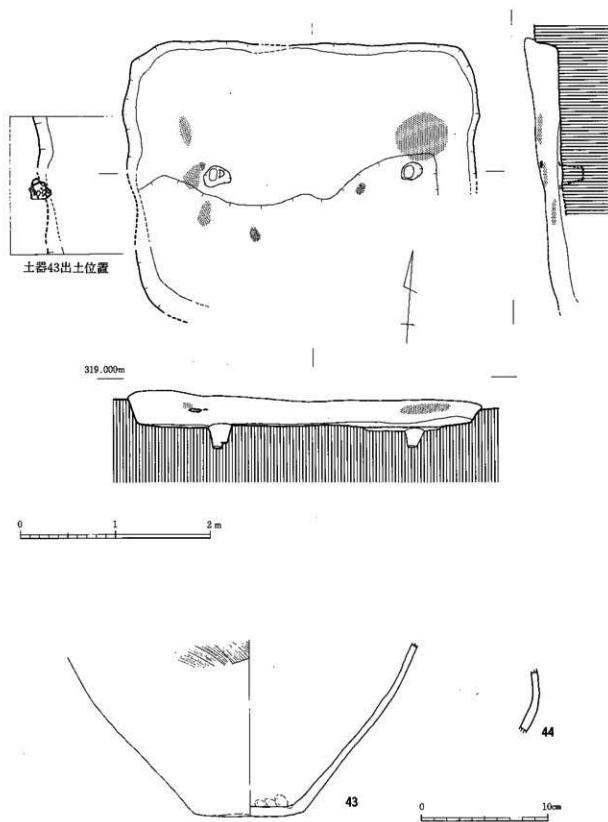
- 36 SA 2 出土磨石 (石)
 37~39 SA 2 出土鉄器 (鉄)
 40 SA 4 出土台石 (石)
 41 SA 4 出土土器 (土)
 42 SA 4 出土砥石 (石)



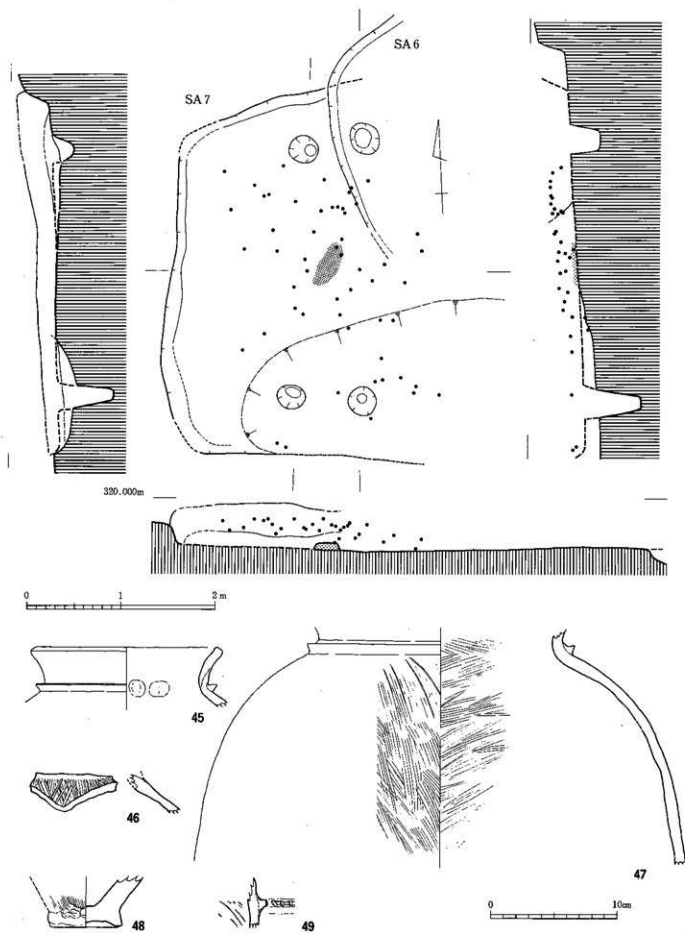
第17図 神殿遺跡 SA 2・SA 4 出土遺物実測図



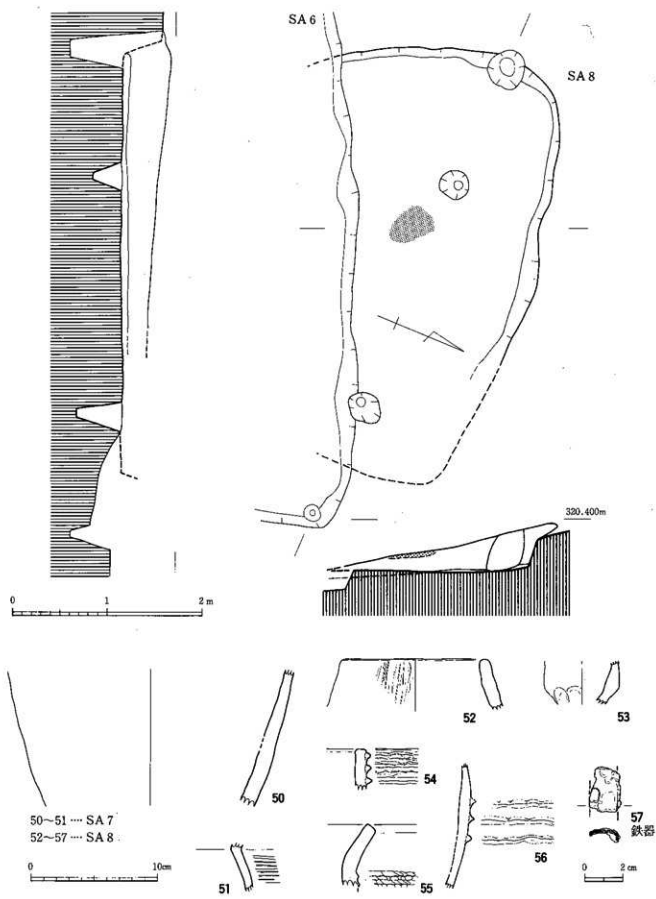
第18図 神殿遺跡 SA 4 遺構実測図 (1/40)



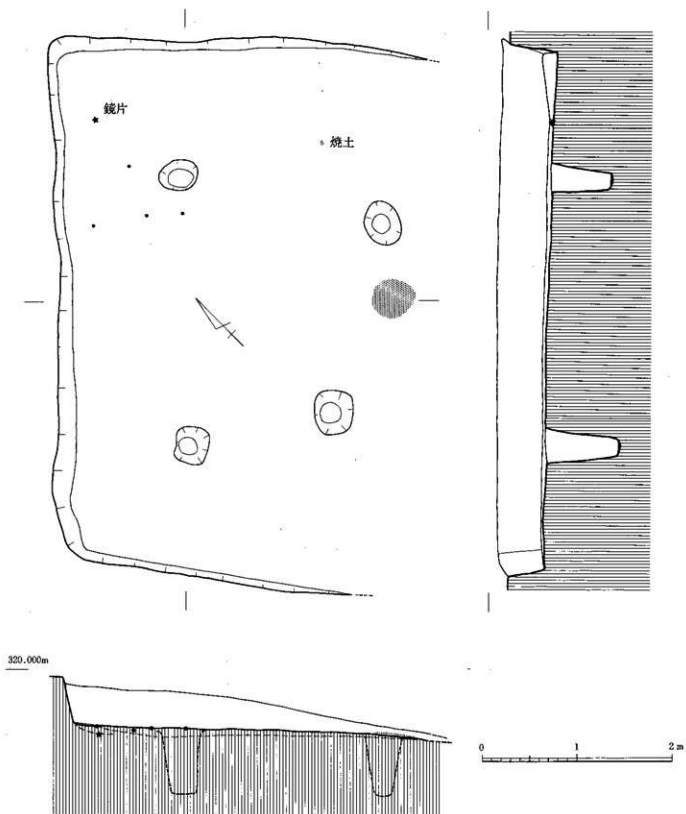
第19図 神殿遺跡 SA 5 遺構・出土遺物実測図



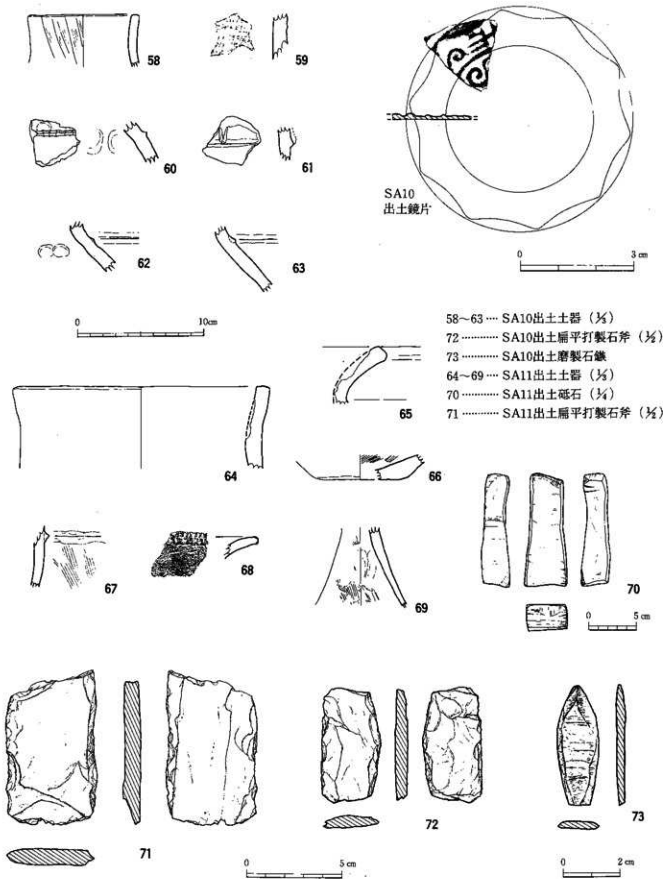
第20図 神殿遺跡 SA7 遺構・出土遺物実測図



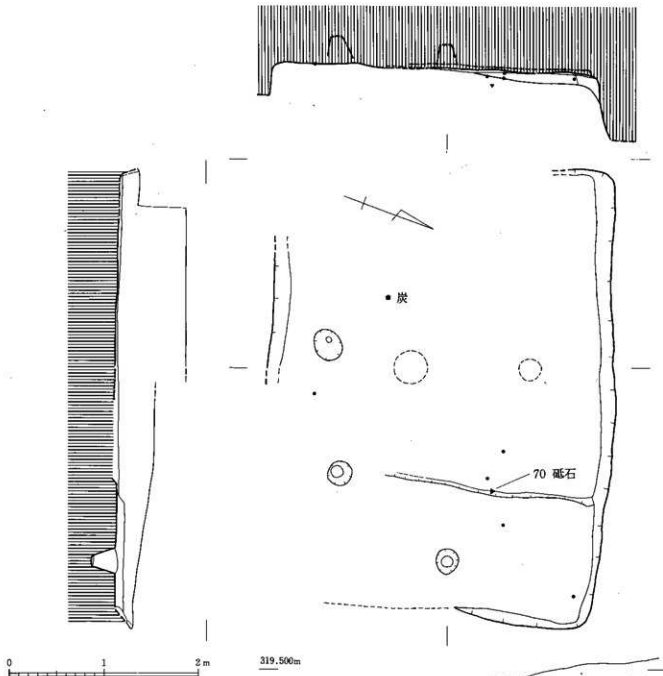
第21図 神殿遺跡 SA 8 遺構およびSA 7・8出土遺物実測図



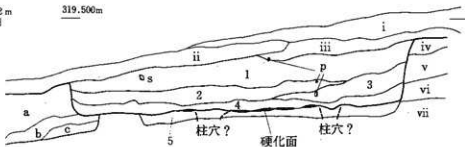
第22図 神殿遺跡 SA10 遺構実測図 (1/40)



第23圖 神殿遺跡 SA10・11 出土遺物実測圖

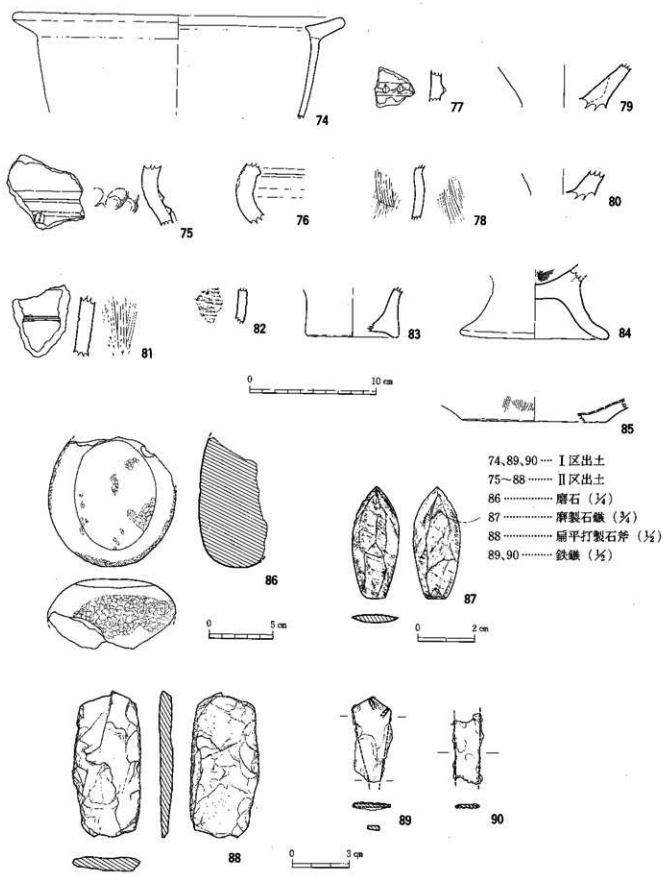


- 0 1 2m
319.500m
- 1 褐色(10YR4/4)
きめ細か、砂粒を含むがザラつかない。
炭化物少洗。
 - 2 明褐色(7.5YR5/8)
粒性をもちしまる。
黄褐色土粒(0.5~3mm程度)が多く洗。
炭化物も1cm弱のものがみられる。
 - 3 褐色(10YR4/6)
きめ細か、砂粒・炭化物は微量洗。
黄褐色土粒も散見される。
 - 4 二色い褐色(10YR4/3)
3よりきめ細か。
砂粒、黄褐色土粒はほとんどみられない。
炭化物は微量では少ないが、西側壁土中には多量に含まれていた。
 - 5 viに類似するが、viに比べ軟質のため、貼床部の可能性大。
- a~c 別な遺構と思われる落ち込み
- a 褐色(10YR4/6)
しまる。砂粒や炭化物洗。
 - b 褐色(10YR4/4)



- i 明褐色土(7.5YR5/6) しまるが、バサバサ。
炭化物(1~2mm)や砂粒を含む。北端部上面はSA6床面。
- ii 褐色(7.5YR4/6) やや軟。i層に比べ砂粒は少ない。炭化物洗。
- iii 褐色(7.5YR4/4) 硬くしまる。i層に類似。
- iv 暗褐色土 この層の上面がSA11の掘り込み面に相合、またはごく近いと思われる。
- v 褐色土に硬質の暗褐色土ブロックが多く洗。(I区V層に相当)
- vi 黒褐色土(7.5YR3/2)にATと思われる黄色土粒~ブロックが洗。
- vii 黒褐色土に白色透明の粒子が多量に洗。硬。やや硬。色調にやや紫味有り。(I区V層に相当)

第24図 神殿遺跡 SA11 遺構実測図 (1/40)



第25図 神殿遺跡 弥生時代の遺物

第4節 歴史時代の遺構と遺物

遺構

歴史時代の遺構としては、竪穴住居跡のSA6とSA9がある(概要は第3表)。2軒とも地形の傾斜方向に主軸をとり南面するが、一部を欠くため住居の全容は明らかでない。

SA6(第26図、図版12・13)は、Ⅱ区中央に位置し、Ⅱ区調査開始前の土層確認時の掘削により南東部～中央を、また、調査面の設定時には南半を失っている。

柱穴は、確定できるものが検出できなかった。遺構中央にピットがあるが、比較的浅く、積極的に柱穴とするには確証に欠ける。

床面は、西半部では硬化面がなく検出が困難であった。北東部南側の遺構断面では、3～5cmの貼り床状の硬化した土層が確認されている。床上面での調査終了後、全体についての貼り床の有無や範囲、柱穴の有無を調べるために掘り下げたが、確認には至らなかった。

SA9(第27図、図版13)は、SA6から北西方向に約10m上方の位置にある。

床面の中央やや東寄り、土坑SC8により切られており、北側柱穴上部も失われている。

柱穴は、主軸上に2本という構造が認められる。

南西部は、遺物は出土しているものの、軟質土のために確実な床面を検出できなかった。

遺物

遺物は、SA6・SA9の他、包含層内からも出土している。遺物個々の所見については第7～10表を参照されたい。

SA6・SA9の出土遺物を見ると、量的な違いはあるものの、器種構成の点では、2軒とも土師器甕と須恵器の坏・坏蓋・高台付坏・壺・甕、鉄器を出土し、また、その形態にも共通するものがある。

SA6の出土遺物(第28図、図版18)は、埋土中からの91・93・95～97を除き、床面直上または床面近くで出土したものである。

土師器甕94は、角閃石などの鉱物粒を多く含む粗質の胎土を用いており、外面の器面調整にはハケを用いるが、内面は、指によるナデや押圧で、部分的に粘土の輪積み痕を残している。91は、94と異なり精良な胎土で、内面にケズリによる調整が見られる小型の甕底部である。焼土面の北側で床近くより出土したが、同時に検出面に近い位置でもあるので、SA6に伴わない可能性もある。

鉄器は、掲載した鉄鏃(101)・棒状鉄器(102)の他に、錆のために形状や断面形が不明の棒状鉄器1点と鉄滓1点(図版18)がある。

SA9の出土遺物(第28～30、図版18)は、床面から浮いた位置で出土したものが多くことから、これらがSA9に伴うのか否かについては留意せねばならない。しかし、遺構検出面の低さから、検出面で出土したものであっても位置的には大半が床面に近くなるので、ここでは一括して掲載している。

床面および埋土下層で出土したものは103・107・115・118・121・135で、106は柱穴底面から出土したものである。110・112・113は、床面の検出できなかった南西部で、ほぼ床面レベルで出土した。検出面近くで出土したものは119・133である。他は、埋土下半部出土である。

土師器甕128～130は、外面全体にハケ目痕の明瞭なハケ調整を施したもので、128の頸部の形状から、口縁部は曲線的に外方に開くと思われる。128と129は同一個体とみられるが、内面の調整は、頸部ではナデ、胴部では弱いケズリが施されている。ケズリは強いナデとも言えるもので、砂粒の動きは認めら

れるが、ヘラ単位の境界は不明瞭である。調整の最後に丁寧にナデている箇所も散見される。130は、内面ナデ調整で、粘土の輪積み痕を残している。

同じ土師器甕でも、132・133は前述の甕とは明らかに異なり、胎土が精良で、調整も胴部内面のケズリが顕著である。133は口縁部が横外方に強く反り、頸部は器厚が最大で内面は明らかな稜線を持ち屈曲する。133は、この所見と出土位置から、後の平安時代の遺物の可能性が考えられる。

土師器坏118～121は当該地域の福年が不十分のため時期を確定できないが、次に述べる須恵器の時期に準じる時期のものとして扱いたい。

鉄器は、SA 6と同様の棒状鉄器1点(104)と鉤状の鉄器1点(103)が出土している。

布痕土器は、SA 9埋土上層より2点(161・162)出土している。胴部小片のため器形は明らかでない。161は焼き締まりが良く布目も明瞭であるが、162は軟質で、磨耗が激しい。布痕土器は、この他、遺構外からも、外面に指頭圧痕のある口縁部片1点(163)が出土している。

須恵器と住居の時期

須恵器を見ると、SA 6・SA 9のどちらも、97や106といった8世紀前半から中葉にかけての時期に比定される高台付坏がある一方で、98や110・111・113のような9世紀初頭の要素を持つ壺も出土している。この時間差が、住居の存続期間に相当するのか、新旧どちらかの遺物が混入遺物なのか、といった解釈の如何によって、住居の時期が左右されことになる。SA 9では、両者を結ぶ8世紀後半～末のものも出土しているので、住居の使用期間は比較的長かったと推測される。しかしながら、SA 9柱穴底面から出土した106が柱穴内に流入した時期が、住居の構築時か廃棄後かによって、微妙に住居の時期に影響するだろう。また、先の9世紀初頭とみられる須恵器の出土位置が、埋土の上層や床面を欠く南西部で出土していることから、SA 9北壁が当初から浅く、北側埋土上層から南側に向かって床面を崩しながら堆積した9世紀初頭の包含層(埋土第1層か)が存在した、ということも考えられる。

いずれにせよ、SA 9の時期は9世紀初頭以前の時期には違はなく、ここでは、時期幅を大きくとり8世紀代(奈良時代)という年代を与えておきたい。

遺構外の遺物(第30図)

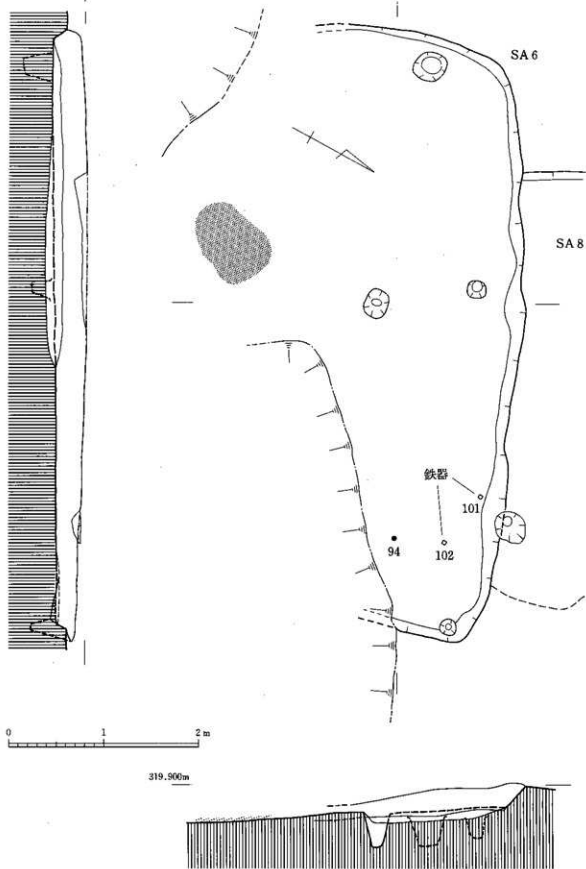
歴史時代の遺物は、遺構外の包含層でも出土しており、須恵器、土師器、布痕土器、鉄器がある。土器類は小片が多いため器形が復元できるものは少ない。

時期を確定しやすい須恵器食器類(136～143)を見ると、136が古墳時代の坏の形態的特徴を残し7世紀後半に位置づけられる他は、住居の時期とも重なる8世紀後半～9世紀初頭のものである。ここでいう包含層が、実際には層としてほとんど残存せず、調査面まで住居の一部を削りながら掘削し除去した包含層をも含むことを考えると、遺構外出土の遺物中には、本来住居に伴うものも少なくないと推察される。事実、そのうちの何点かは住居内のものと接合している。

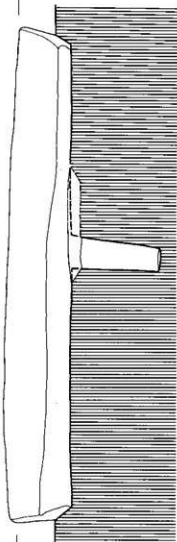
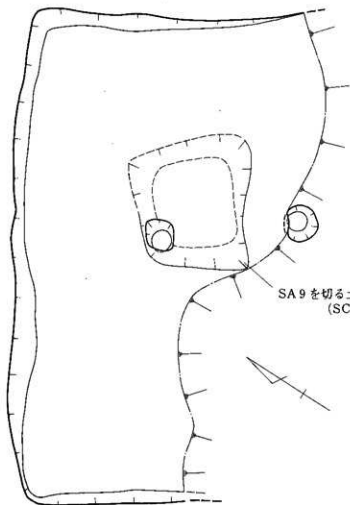
須恵器とした142と土師器とした156は、胎土がやや異質のため、中～近世の土器の可能性もある。

146は、須恵器か土師器か判別できない中間的な胎土の坏である。

鉄器は3点出土している(図版18*3～*5)。*3は断面方形の棒状。*4は鉄身か。*5は板状である。これらの他、現代のものと同判別できないものが2点ある。

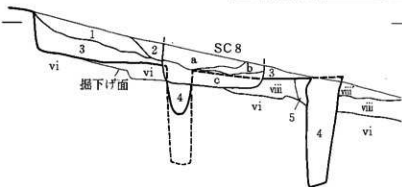


第26図 神殿遺跡 SA 6 遺構実測図 (1/40)



0 1 2m

— 321.700m



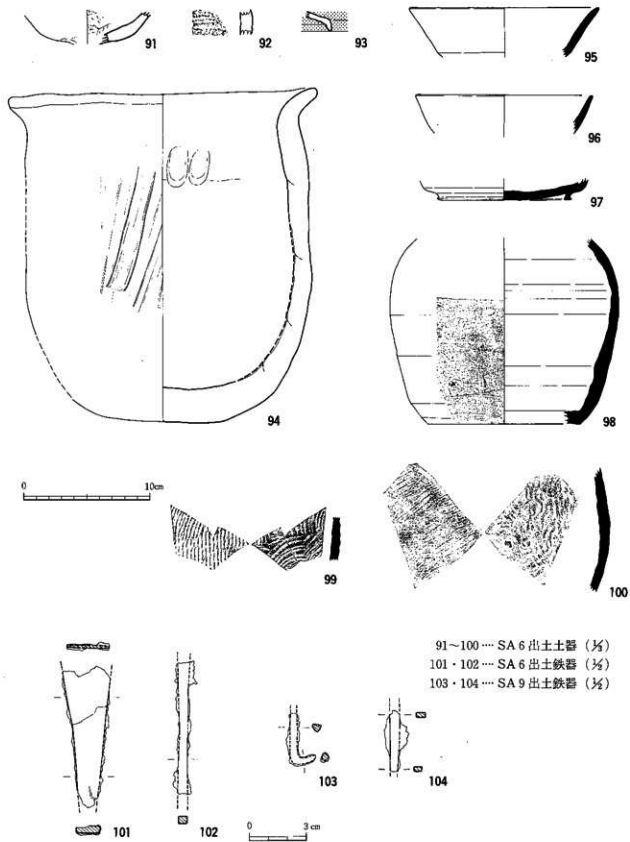
黄褐色土粒～小ブロックが少量、
軽石？軽石が微量みられる。
一部、黄褐色土のブロックが集中
して塊状している箇所がある。
比較的大きな(2-5mm)炭化物を含む。
(第17部SA11掘土断面図中のvi層に対応)
vi 褐色(7.5YR4/6) しまる。下層の方が暗色。
炭化物・軽石？繊維なし。
白・透明の粒子あり。
vii viよりやや暗色。

- 1 暗褐色(10YR3/3) 硬くしまる。
炭化物、黄褐色土粒少量混入。
白や透明の粒子を含む。
- 2 1とはほぼ同質だが、より暗色で硬くしまる。
- 3 褐色(10YR4/4) 非常に硬くしまる。
硬質の暗褐色ブロック、炭化物、各々少量混入。
白や透明の粒子を含む。
- 4 褐色(7.5YR4/6) 柱穴埋土。軟。
炭化物微量混入。
柱底は確認できない。

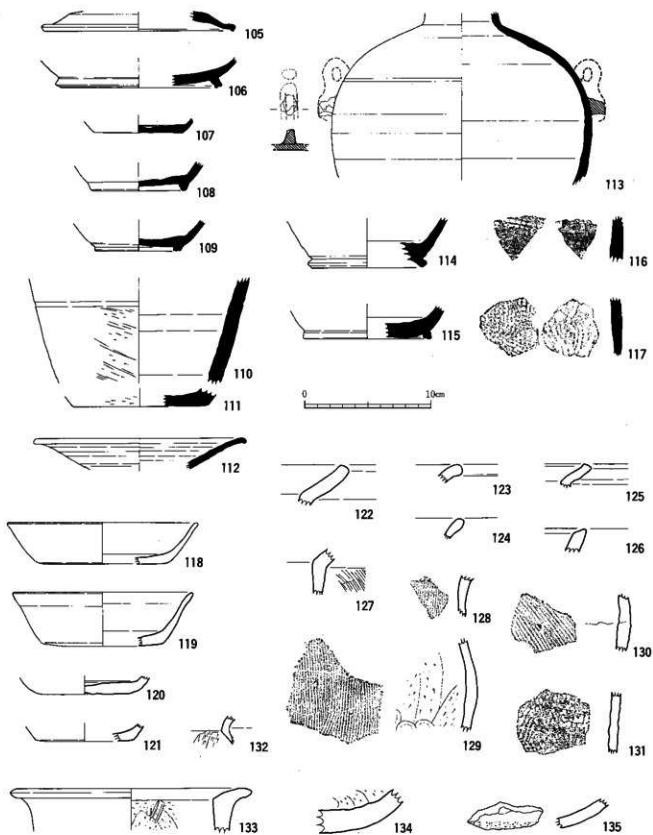
- 北側柱穴埋土…底面から須恵器高台付坪の底部
(第22図106) 出土。
南側柱穴埋土…土層は硬くしまるが、下層にな
るにつれて軟性となる。
- 5 褐色(7.5YR4/3) しまる。きめ細か。混入物
なし。
viiとの境界ラインが不自然なため、地山埋積層
の一つなのか、柱穴に充填または混入した土な
のか調査時に判別できなかった。
 - vi 黒褐色(7.5YR3/2) しまる。

- SC8埋土
- a 暗褐色(7.5YR3/4)
砂粒を多量に含む。
 - b 褐色(7.5YR4/4)
aに類似し、砂粒を多量に含む。
 - c 暗褐色(10YR3/4)
炭化物、黄褐色土粒を多く混。
砂粒少量含む。よくしまる。
 - d 黒褐色(10YR3/2)
硬くしまる。砂粒なし。炭化物微量混。

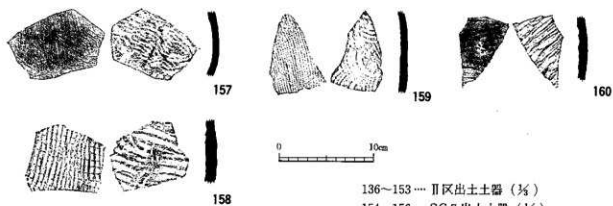
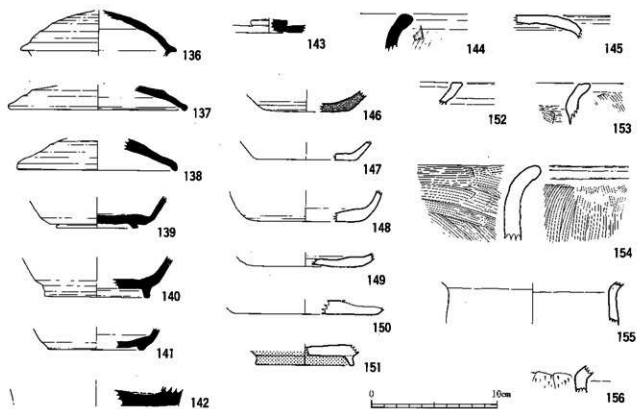
第27図 神殿遺跡 SA9 遺構実測図 (1/40)



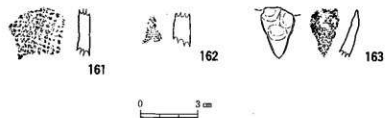
第28図 神殿遺跡 SA 6・SA 9 出土遺物実測図



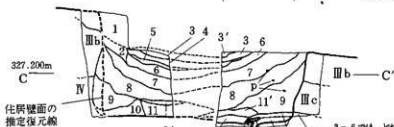
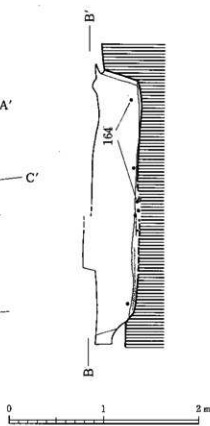
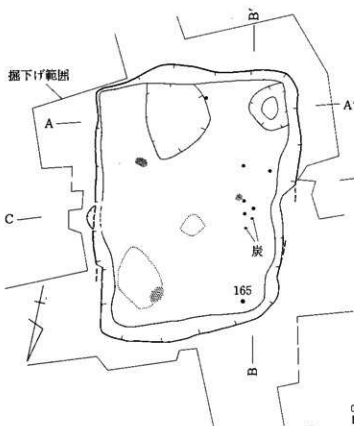
第29図 神殿遺跡 SA 9 出土遺物実測図 (1/3)



- 136~153 … II区出土土器 (1/2)
 154~156 … SC7出土土器 (1/2)
 157~160 … II区出土須恵器残片 (1/2)
 161~163 … 布痕土器 (1/2)
 (161・162はSA9、163はII区出土)



第30図 神殿遺跡 SA9・SC7およびII区出土歴史時代の遺物



- 1 灰黄色(10YR 4/2) 硬。細か〜粗開孔所にあり。
- 2 基本的にはほとんど1と変わらない。1より若干IV層土の混入量が多し硬。1との境界判断に迷う。
- 3 3とはほぼ同質だが、より硬く、しまる。3よりアカホヤ混入少。
- 3 褐色(10YR 4/4) 硬。IV層と思われる土を基に、混入物としてアカホヤ小粒(0.2~0.5cm)、IV層小ブロック(0.5~0.8cm)、炭化物粒(II層?・IV層に全体に洗っているものも細片という感じ。0.1~0.2cm大)が入る。
- 4 黄褐色(10YR 4.5/3) 以下のもが入っている。
- IV層?小ブロック(0.3~1.5cm)、に黄褐色(2.5Y6/3)砂質土小ブロック(長さ1.5cm、V層土か)少、アカホヤ(AT?)ブロック(1.2cm)ごく少、炭化物粒多。
- 4' 4'に多くに炭化物粒多く混。
- 5 5'に黄褐色(10YR 4.5/3) 非常に硬。以下のもが入っている。
- 4'に含まれる砂質土多(まだら状に入る)、炭化物、黒褐色土小ブロック、黄色粒~小ブロック(-0.4cm、アカホヤ?AT?)
- 6 黄褐色(2.5Y 4.5/4) 硬。II層・IV層?・V層の粒~小ブロック(-0.6cm大)。V層は1.5~2cm大も少洗。6'が洗っている。黄色小粒(アカホヤ?)少洗。
- 3~6では、どれも白色半透明細粒が比較的多く含まれる。V層土起源か。
- 7 8と同質で、やや硬。
- 8 褐色(10YR 4/4) やや軟。炭化物粒やIV層粒~ブロック(-0.5cm多、2~3cm少)洗。
- 8' 8より炭化物多。
- 8' 8'では、V層とみられる暗褐色(10YR 3/3)の硬質土小ブロック(0.8~1.2cm)を少量含む。
- 9 9'に黄褐色土(10YR 4/3、II層?)とIV層粒~ブロック(0.2~1cm、3~5cm)が混。よくしまり硬。上層は両者がよくなじみ、より硬。炭化物粒(0.2~0.4cm)やや多く洗。
- 10 黄褐色(10YR 5/6)土 よくしまり、硬。
- IV層ブロック(0.5~3.0cm、8cm大も)、IV層土(III cに近い)が混。
- 11 9と同様。9'に黄褐色土(10YR 4/3 II層?)とIV層土粒~小ブロック(-0.5cm)が混じる。炭化物混。しまりなく。軟。
- 11 11'よりやや硬。
- 11 11'と同様。9'に黄褐色土(II層?)とIV層土粒~小ブロック(ここでは0.2~0.5cm)が混じるが後者の比率は小、炭化物粒混。やや軟。
- 12 12'より硬。
- 13 黄褐色土(10YR 3/2) やや硬。粘束的なものか?
- IV層ブロック(0.2~0.5cm)、に黄褐色砂質土ブロック(0.3~0.8cm、4にも混入)少。炭化物粒が混。
- 1~13'では、火山灰起源とみられるガラス質細粒を全体に含む。

第31図 神殿遺跡 SA3 遺構実測図 (1/40)

第5節 時期不明の遺構と遺物

時期を確定できなかった遺構は、I区のSA3、SZ2・SZ3、II区のSC6～9である。掲載した遺物個々の所見については第10表を参照されたい。

SA3 (第31・32図、図版5・8・18)

SA3は、SZ2・3から北西側に延長したトレンチ内で、まず床面から検出された堅穴遺構である(概要は第3表参照)。埋土の状況は第31図のとおりである。東壁部での埋土第1層の状態からは、第1層を埋土と見るか、遺構上の堆積土と見るかによって、堅穴掘り込み面が第1層より上面にあるか、Ⅲb層と第1層の境界面に相当するか、第1層が遺構壁面を崩して堆積したか、という二通りの想定ができるが、これは、後述する遺構の時期の如何とも関わってくるであろう。

また、断面西半部の土器164の東西にある埋土第12・13層は、その所見や掘り込み下面の低いレベルから、貼り床に相当する可能性もある。その場合、164は遺構南端部の土器片と接合しているので、164の出土位置についての解釈は、その上の礫と共に、未検出のピット様の落ち込み内に入り込んだか、土圧により貼り床内に入り込んだと推測される。

柱穴は、遺構下面全体をIV層面まで掘り下げたが確認されなかった。

遺物は、確実にSA3に伴う床面出土のものが少なく、第31図にドットで示した7点のみである。そのうち、2点は前述の164、北西隅出土の1点は165である。166・167は埋土中から出土したものである。

遺物は、概して弥生時代後期に属すると思われるが、床面出土の甕165は、全体の器形は不明だが、頸部から胴部上半にかけての形状や器厚・胎土・調整等に、SA6の奈良時代の土師器甕(第28図94)との類似点があり、最終的な遺構の時期判断に躊躇した。埋土中出土の土器片に、SA2の土器と接合したものもあるが、SA2との時期的な関係が明らかでない現時点では、言及できない。

SZ1 (第11図、図版6・8)

SZ1については、トレンチのみの調査である。SZ2・3の遺構確認のために設定したトレンチを南に延長したところ、トレンチ断面に焼土粒が面的に集積する箇所が発見された。これを契機に、トレンチを拡張しながら精査に努めたが、本遺跡の弥生時代の住居の埋土内に見られるものと同様の、レベルの異なる焼土集積面が数ヶ所検出されただけで遺構形状の確認には至らず、遺構検出は断念した。

SZ2・SZ3 (第25・33図、図版6・8・15)

SZ2・SZ3は、住居様の、方形遺構の一部を思わせる形状の落ち込みが、切り合って検出された遺構である。Ⅲ層を掘り込んだ遺構がⅢ層に被覆されたといった感があり、遺構の検出は困難であった。図中の遺構ラインは埋土のわずかなにごりをもとに引いたもので、推定に近い。SZ3東隅部の壁面のみは、下半がIV層に掘り込まれていたため確認が容易であった。

SZ2は、現存主軸長2.05m、現存最大幅5.40m、壁面部での現存最大深0.22mである。南東部には焼土粒の集積箇所があり、床面のレベルがほぼ一定であることから住居跡の可能性が高い。

SZ3は、現存主軸長3.65m、現存最大幅3.65m、現存の壁面部での最大深は東端隅部で0.29mである。遺構は地形に沿って傾斜し、SZ2のような床面は確認できなかった。

以上の二遺構は、住居の可能性を否定できないが、やや丘陵根柢に近い比較的急な斜面に立地することから、堆積土の動きによる遺構の流失が激しいとみえ、全容は不明である。

両遺構の出土遺物は、土器片計約60点であるが、ほとんどが検出面付近からそれ以上のレベルで出土しており、遺構に伴うものか、遺構上面を壊しつつ流入した土に含まれたものか、判別が難しい。ただ、周辺の遺物出土状況と照らし合わせても、遺構上に遺物が集中していることから、少なくとも検出面で出土のものについては遺構内遺物として取り扱っている。S Z 2の遺物には、168～170のような、厚手粗製の甕が多く見られる。168・169は接合しないが、同一位置で出土したことや胎土・調整の酷似により同一個体の可能性が極めて高い。S Z 3上の遺物は、171・172を含む約20点が出土しているが、うち、171および未掲載2点は、S Z 2床面と同レベルで出土している。二遺構の先後関係が不明のため、この3点はS Z 2に伴う可能性もある。また、S Z 3西部では、古墳時代の丹塗り土師坏片が出土している。

SC 6 (第34図、図版14)

SC 6は、ややいびつな円形の土坑である。Ⅱ区南東部の黒褐色土面で検出され、SA 5北西壁面に近接した位置にあり、埋土はSA 4・5と同様の褐色土である。規模は、径1.06m、最大深が0.22mで、遺物は阿蘇溶結凝灰岩塊1点(重さ約6.0kg)のみである。この岩塊には、石器としての使用を示す痕跡がなく、また、ガラス質分は多いと思われるものの、石器用の母岩には不適当と思われるので、用途や土坑中に廃棄された理由については手がかりが得られなかった。

SC 7 (第34図、図版14・18)

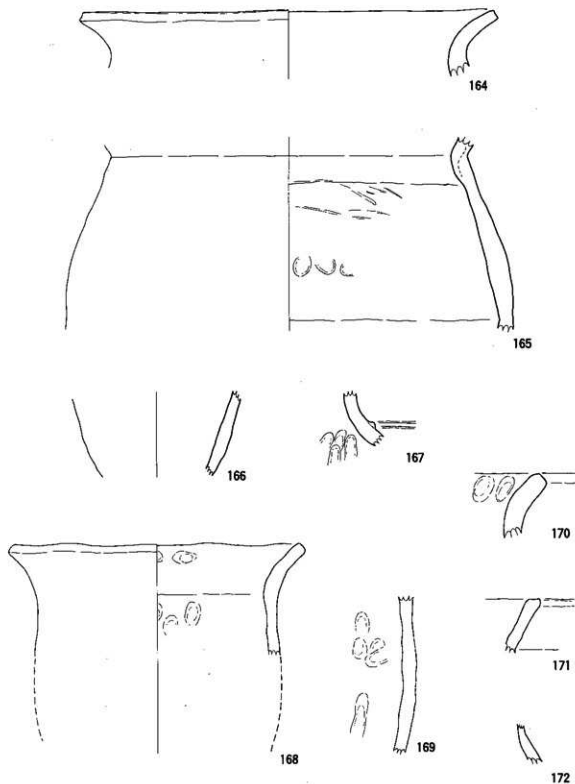
SC 7は、Ⅱ区北東部、SA 9の東約12mの位置にあり、やや側辺の影らむ長方形の土坑である。規模は、主軸長1.96m、最大幅0.85m、最大深0.35mを測る。形状から土坑墓の可能性も考えられるが、遺物は埋土中位より土師器小片が9点(うち3点は154～156)出土したのみで、墓坑であることを裏付けられるものは皆無であった。出土土器の器種や調整を見ると、SA 9出土のものと同通点があることから、遺構の時期は、SA 9と同時期あるいはそれ以降と考えられる。

SC 8 (第27図、図版13)

SC 8は、住居跡SA 9を切る土坑である。住居埋土断面の観察時に初めて確認されたが、既にトレンチにより分断されており、全容は不明である。形状は、残存部分から、隅丸の方形を呈すると推定され、規模は、推定主軸長1.35m、現存最大幅1.22m、埋土断面での最大深0.46mである。時期は、土坑が住居の北側柱穴の上部と床面の一部を切っていることから、SA 9の時期より後ということになるが、掘り込み面の位置を知る手がかりは、埋土所見からも得られなかった。住居内に位置することから、土坑の掘り込み段階が、「住居の埋没中途か埋没後か」、「住居跡の存在を意識したものか否か」、といった点が遺構の性格を知る上で重要になるだろうが、言及できるだけの情報が得られなかった。類例の報告が待たれる。遺物は、須恵器片2点が出土しているが、うち1点はSA 9内のものと接合しており(115)、住居埋土からの流入遺物であろう。

SC 9 (第12図)

SC 9はⅡ区中位の西側に位置する円形の皿状の土坑である。規模は、径約1.2m、中央の深さは約6cmと浅い。埋土は褐色土で、遺物は礫片が数点あるのみである。

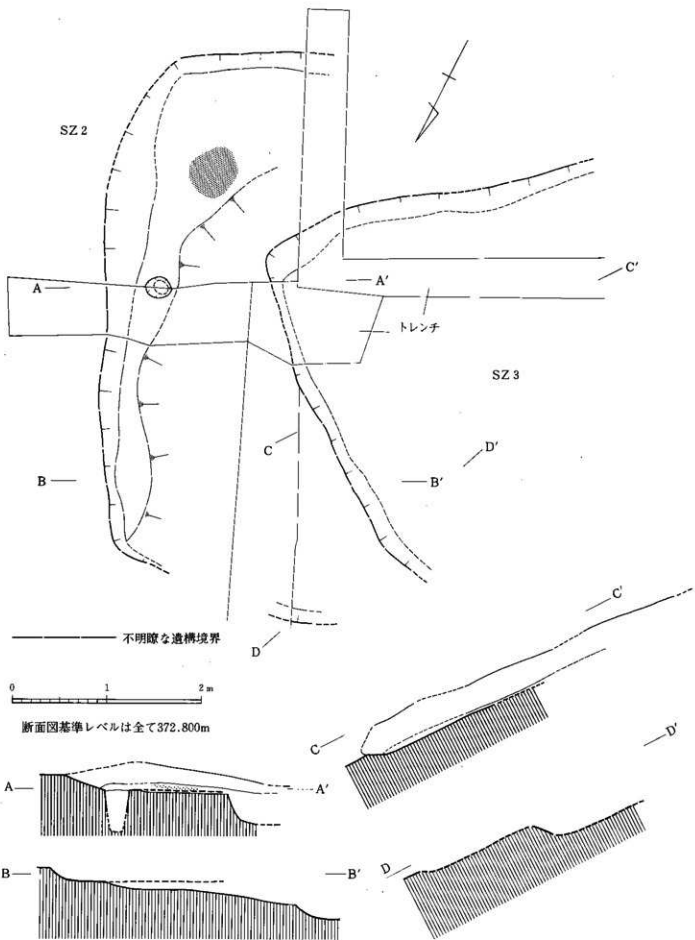


164~167 … SA 3 出土土器

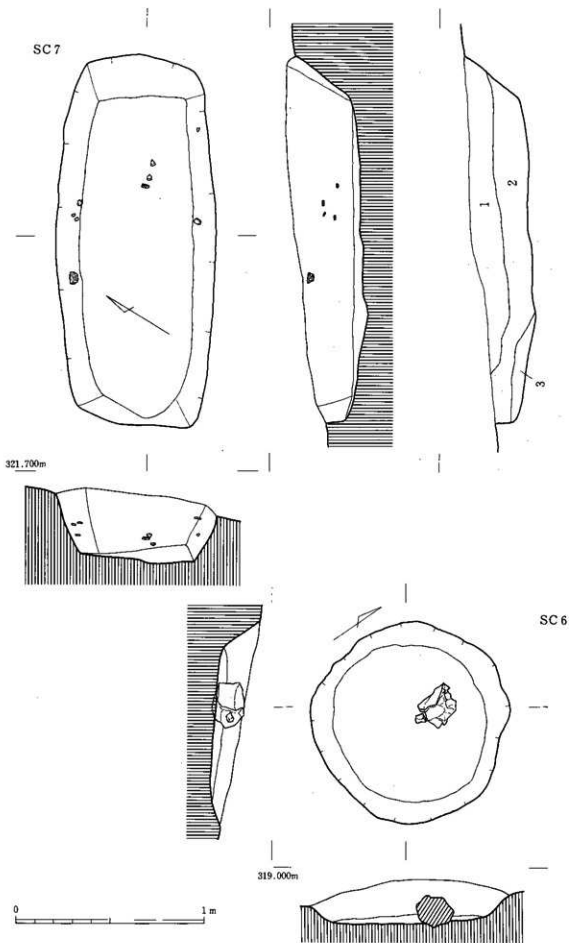
168~172 … SZ 2・SZ 3 出土土器

0 10cm

第32図 神殿遺跡 SA 3・SZ 2・SZ 3 出土遺物 (1/3)



第33図 神殿遺跡 SZ 2・SZ 3 遺構実測図 (1/40)



第34図 神殿遺跡 SC6・SC7 遺構実測図 (1/20)

第6節 おわりに

神殿遺跡A地区では、縄文時代後晩期から古代にかけての遺構・遺物が検出された。

特に、本書で報告した弥生時代後期～古墳時代初頭の竪穴住居跡10軒、奈良時代の竪穴住居跡2軒の検出は、それぞれ当時のこの地方の集落のあり方を示すものとして大きな成果であった。

はじめに述べたように、神殿遺跡全体の調査成果については、隣接するB地区の調査結果と合わせてまとめるのが望ましい。そのため、ここでは、A地区の調査成果や課題について整理し、A地区内で完結する奈良時代の遺構と遺物についてのみ、まとめてみたい。

弥生時代の住居跡について

神殿遺跡の弥生時代の住居跡は、後期から古墳時代初頭に至る時期のものが検出されているが、とくにⅡ区においては遺構の全体像を捉えられるものが極めて少なく、遺構の構造や遺構間の同時期性、分布について言及できる材料に乏しい。遺構所見で特筆すべきことには、焼土面が埋土中に検出され遺構埋没過程の途中で火を使用した形跡のある住居が多いこと、SA5のように赤色顔料を床に散布する例のあること、SA10のように住居廃棄時に鏡片を投じる例のあることなどがあり、同時期の分県大野川流域の集落の住居跡との共通点が見られる。同じ高千穂町内で、同時期の遺構や遺物を検出した遺跡には、宮ノ前第2遺跡¹⁰⁾、梅木原遺跡¹¹⁾、岩戸五ヶ村遺跡¹²⁾、吾平原遺跡¹³⁾などがあるが、隣接する分県や熊本県の調査例とそれらを合わせて比較した、本遺跡の弥生時代の集落全体の歴史的な評価については、SA1を含めてB地区の調査結果報告時に譲りたい。

SA10出土の鏡片について

SA10では住居床面から鏡片が出土した。これは、県内では新富町七又木遺跡¹⁴⁾、西都市松本原遺跡¹⁵⁾に次いで3例目である。

鏡片は、内行花文昭明系異体字銘帯鏡の内区片である可能性が最も高いと考えられるが類例がなく¹⁶⁾、現在のところ、鏡本来の姿や時期の詳細については不明である。

SA10の時期は、鏡片を伴う住居が一般的に見られる終末期としたが、今後、鏡の評価によってはやや時期が遡る可能性もあると思われる。

奈良時代の住居について

これまでに、県内で奈良時代単独の遺跡を調査した例はほとんどなく、奈良時代の遺構や遺物を含む遺跡として、国府所在地である西都市の、寺崎遺跡¹⁷⁾、上尾筋・下尾筋遺跡¹⁸⁾、上妻遺跡など、都城市の上ノ園第2遺跡¹⁹⁾、横尾原遺跡²⁰⁾、新富町上園遺跡²¹⁾、窯跡である下村²²⁾・莓田²³⁾・古川²⁴⁾・松ヶ迫²⁵⁾の各遺跡、墳墓である宮崎市広原横穴墓²⁶⁾などがあるのみである。そこでは、大抵において、続く平安時代の遺構・遺物と共に検出されるため、明確に時代を分かちることが難しい状況にある。これらの中に、当時の集落のありかたを示すものはなく、集落の一部であろう住居として、新富町上園遺跡で竈を持つ住居跡が1軒確認されているのみである。こうした状況の中、本遺跡で検出されたSA6・SA9の2軒は、奈良時代と確定できる住居跡として非常に重要な資料であるといえよう。

遺物に関しては、これまで奈良時代のものとして報告されてきたのは、最も抽出しやすい、律令体制

下において一層斉一性が強くなる須恵器食器類である。一方、在地性を強く残していると思われる煮沸具の土師器甕は、窯跡や墳墓からは出土しないうえ、良好な一括資料がないため、編年が空白の状態であり、実体がつかめず、仮に奈良時代のものが出土していたとしても抽出できない、という状況である。今回の調査によって、その空白をわずかながら埋めるべき資料が得られたのは貴重な成果であった。

すなわち、94・128・129の器形や、94・130の内面にケズリ調整が見られず粘土輪積み痕をやや残す点は、県内平野部の古墳時代末の甕の特徴に通じるものがあり、129内面の弱いケズリは、平安時代の内面ケズリ調整の顕著な甕につながるもの、といった感がある。また、128～130のハケ目は特徴的で、同様のハケ目のある154も器形と共に同時代のものと思われる。資料数の少なさや出土位置の不確定に若干の躊躇があるが、この時期の土師器甕について概観すると、器厚の内面ケズリによる調整技法も採用され始めたが、未だ胴部内面全体に施すには至らず、前代のナデ主体のものも依然として存在する、というものである。

布痕土器について

SA 9およびⅡ区包含層で出土した布痕土器3点は、焼塩用の土器と考えられるが、その流通経路については、胎土・器厚・推定径などが県南部を中心に出土する厚手円錐形の布痕土器とは様相を異にするので、例えば、北部九州や瀬戸内などの、全く別の経路によるものと考えられる。しかし、残念ながらいずれも小片であるため情報量が少なく、この問題については言及できない。類例の蓄積が待たれる。

時期不明の遺構 SA 3 について

SA 3の時期については、遺物が少ないことに加え、出土した土器165の時期が確定できなかった。調査例の少ないこともあり、弥生～奈良時代の土器編年が確立されていない現時点では、時期不明にせざるを得ない。今後の調査例や土器編年の成果によっては、明らかにされ得ると期待される。

遺構の性格については、床面の焼土や炭化物の存在が気になるところだが、継続して居住用に使用するには小さすぎるため、作業用や貯蔵用といった付属的な施設と考えられる。

以上、神殿遺跡A地区の調査について報告した。この調査の成果によって、西臼杵地方の弥生時代後期から古墳時代初頭の集落の様子がより一層明らかになっていくであろう。また、奈良時代については、古墳時代と古代とを繋ぐ重要な位置にありながら、これまで不透明だった「律令国家成立期の日向」の一様相を示す良好な資料を得ることができた。

私たちは、とかく現代の感覚で山間部を捉えがちであるが、豊後・肥後・日向の三方に通じるこの地は、決して平野部と断絶することなく、より強固な律令国家確立に向かう歴史の流れに沿いつつも、独自性を失わずにいたようである。

最後に、調査中から報告書作成までの間、ご教示やご協力をいただいた下記の方々と、発掘調査中、水不足・人手不足等の過酷な条件下、作業に従事していただいた作業員のみなさんに深謝の意を表します。

赤司善彦 飯田博之 岩永哲夫 緒方俊輔 小山 博 甲元眞之 米久田眞二 菅付和樹
 高倉洋彰 谷川聖紀子 谷口武範 成瀬正和 日高広人 藤丸紹八郎 北郷泰道
 宮崎県立高千穂高校 高千穂町教育委員会 宮崎県工業試験場
 作業員のみなさん (秋月真澄 伊木ツル子 池崎純子 石井勝子 入佐博子 内倉ヒサ子
 榎木和代 岡田なつみ 小野和子 薫 孝音 川畑幹子 木村節子 黒川千代子 黒木美智子
 佐藤ケイ子 瀬尾和子 高野弘子 田崎恭子 俵 公嘉 長友妙子 奈須ヨシ子 萩原絃子
 橋口多希子 船石涼代 別府美千代 松崎幸子 松山富美香) (人名五十音順・敬称略)

註

- (1) 「吾平原第2遺跡」「宮ノ前第2遺跡」「城ノ平遺跡」「国道218号線高千穂バイパス建設関係発掘調査報告書」宮崎県教育委員会 1993年
- (2) 「梅ノ木原遺跡」『高千穂町文化財調査報告』第4集 高千穂町教育委員会 1985年
- (3) 1992年、高千穂町教育委員会調査。未報告。
- (4) 「七又木遺跡」『新富町文化財調査報告書』第13集 新富町教育委員会 1992年
- (5) 未報告。
- (6) 西南学院大学 高倉洋彰氏のご教示による。
- (7) 『国衙・郡衙・古寺跡等範囲確認調査概要報告』Ⅲ～Ⅴ 宮崎県教育委員会 1994～1996年
- (8) 「上尾筋・下尾筋遺跡」『西都市文化財調査報告書』第11集 西都市教育委員会 1990年
- (9) 「上ノ藪第2遺跡」『都城市文化財調査報告書』第27集 都城市教育委員会 1994年
- (10) 「横尾原遺跡」『都城市文化財調査報告書』第16集 都城市教育委員会 1992年
- (11) 「上藪遺跡F地区」『新富町文化財調査報告書』第18集 新富町教育委員会 1995年
- (12) 「下村窟跡群(基礎資料編)」『佐土原町文化財調査報告書』第10集 佐土原町教育委員会 1996年
- (13) 「寿田窟跡」『宮崎県文化財調査報告書』第26集 宮崎県教育委員会 1983年
- (14) 石川恒太郎『宮崎県の考古学』吉川弘文館 1968年
- (15) 「広原横穴群」『宮崎市文化財報告書』第5集 宮崎市教育委員会 1979年

参考文献

- 「薄永平遺跡」『国鉄高千穂線建設埋蔵文化財発掘調査報告書』宮崎県高千穂町教育委員会 1978年
 「石井入口遺跡」「石井入口北遺跡」『音生台地と周辺の遺跡』Ⅳ 大分県竹田市教育委員会 1992年
 「内河野遺跡」「板井尾遺跡」『音生台地と周辺の遺跡』Ⅱ 大分県竹田市教育委員会 1987年
 「下山西遺跡」『熊本県文化財調査報告書』第88集 熊本県教育委員会 1987年
 「高畑赤立遺跡」『蘇陽町文化財調査報告書』第1集 熊本県蘇陽町教育委員会 1988年
 「今高塚遺跡」『蘇陽町文化財調査報告書』第2集 熊本県蘇陽町教育委員会 1990年
 「内教城跡」『阿蘇町文化財調査報告書』第4集 熊本県阿蘇町教育委員会 1996年
 山本信夫『北部九州の7～9世紀中頃の土器』古代の土器研究会第1回シンポジウム資料 1992年

第4～10表 神殿遺跡出土遺物観察表について

- 1 本書に掲載した遺物全てについて所見や計測値を記しているが、土器を基準とした構成になっているため、石器・鉄器については各々の欄内に別項目を設定している。
- 2 計測値について 〈 〉内は現存値。()内は復元推定値である。
- 3 胎土について
・基本的に、原料粘土+混和物(あるいは原料土含有物)の形で掲載している。その他、これらに付随する含有・混入物がある場合は対応している。
原料粘土?程度 (風化粘土?焼きまじり厚く、特に多孔質。有機物含有量が多い?)

精 良 (水成粘土?きの織で、やや密。明るい色調。あまり鉱物粒伴わない)
混 和 物→微細砂 (めやすとして0.2mm以下)、細砂 (1.5~2.0mm程度)、中砂 (0.5~1.5mm程度)、粗砂 (1.5~2.0mm程度)、川砂 (丸い細礫) 等記した鉱物中、「黒曜石?」とあるものは、輝石でなく、黒曜石に近似的な黒色先沢粒である。

・粗質の胎土中、近似的なものを分類したものは、粗A (所見は土器1参照)・粗A' (陶、土器7)・粗B (陶、土器3) として略記している (胎土写真は図版15参照)。

遺物 図号	出土 位置	種 別	種 類	法量 (cm)		器 面 調 整		色 調 (外:外側、内:内側)	胎 土	特 記 事 項
				口徑	底徑	器高	外面			
1	SA2	土器	甕	(320)		横ナテ	横ナテ	外: 灰黄褐 内: におい濁・におい黄褐	粗A (粗質粘土+鉱物粗粒多。各閃石含み、5mm以下。灰-褐色の岩片やや多。	
2	SA2	土器	甕	(360)		ナテ・横ナテ 不定方向の ナテ	ナテ	外: 黒 内: におい濁・におい黄褐	粗A	スス付着 (外面)
3	SA2	土器	甕			横ナテ	横ナテ	外: 褐灰 内: におい濁	粗B (粗質粘土+やや偏平で丸味のある1~6mm次の細礫多。鉱物粒含まない)	
4	SA2	土器	甕			横ナテ	横ナテ	外: におい黄褐 内: におい黄褐・褐灰	粗A+黒色(黒曜石?)岩片 (2~3mm大)少。	スス付着 (外面一部)
5	SA2	土器	甕			横ナテ	横ナテ	外: 灰褐 内: 橙・黄灰	粗A+黒色(黒曜石?)岩片 (2~3mm大)少。	
6	SA2	土器	甕			ナテ	ナテ	外: 褐灰 内: におい黄褐	粗A' 岩片やや多。 6Sと近似。	スス付着 (外面)
7	SA2	土器	甕			横ナテ	横ナテ	外内: におい赤褐	粗A' (やや粗質粘土+粗 Aと同量の鉱物粗 粒多)	
8	SA2	土器	甕			横ナテ	ナテ	外: におい濁 内: におい黄	粗A'	スス付着 (外面)
9	SA2	土器	甕			丁寧な横ナテ	丁寧な横ナテ	外内: 灰褐	粗B 13と近似。	スス付着? (外面)
10	SA2	土器	甕			横ナテ・ナテ	横ナテのあと 指ナテ	外: 橙 内: 浅黄・橙	やや精良粘土+川砂(1~4 mm大、1.5mm前後多) 胎土より粗い土質、厚縁	172と同?
11	SA2	土器	甕			ナテ・横ナテ 粗いナテ	横ナテ・粗 いナテ	外: 明黄褐・橙 内: におい黄褐	やや精良粘土+川砂 (2~5mm大)	スス付着 (外面)
12	SA2	土器	甕			丁寧な横ナテ	横ナテ	外: 橙 内: 明褐	粗A'	内面に沈着層の凹部有り (故意に付したのか否か不明)
13	SA2	土器	甕	(292)		ナテ・横ナテ 不定方向の ナテ・指押圧 ナテ・指押圧 ナテ	ナテ・横ナテ 兼ナテ及び締め ナテ・指押圧 ナテ	外: 黒褐・暗褐 内: 暗褐・におい赤褐	粗B 9と近似。	スス付着 (外面)
14	SA2 SA3	土器	甕	(308)		横ナテ・ 粗いナテ	兼ナテ 兼ナテ 兼ナテ	外: 浅黄褐 内: 浅黄・灰黄褐	精良粘土+川砂(1~3mm大) 非常に多。	外面に目撃の痕跡があるが、ナテ の際に砂粒が埋った痕跡の可能性有り。 スス付 (外側一部)
15	SA2	+	甕			指押圧・ナテ	ナテ	外: におい橙 内: におい黄褐	粗A	底部外面に黒沢の種物粗粒の圧痕とその上部に赤の圧痕有り 炭化物付着 (内・外面一部)
16	SA2	+	甕			横・斜ナテ	ナテ	外: におい濁 内: 灰褐	粗A	炭化物付着 (内面ほぼ全部・外面一部)
17	SA2	+	甕			横・斜ナテ	ハテ 横・斜ナテ	外: 橙 内: におい黄褐	やや精良粘土+川砂(1~4 mm大、1~2mm多)	スス付着 (外面一部)
18	SA2	土器	甕			ナテ・タタキ 一部工具痕	斜ナテ 一部工具痕	外内: におい黄褐	やや精良粘土+川砂 (1~6mm大)	
19	SA2	+	複合 口縁 蓋?	(304)		横ナテ・ナテ	ナテ	外内: におい橙	精良粘土+川砂(1.5~4mm 大)多。黒色(黒曜石?)岩 片含。金色黒雲母片少。	胎付突起(へら)による楊子刻み
20	SA2 補遺	+	複合 口縁 蓋?			横指板状文 ナテ	ナテ	外内: におい橙	精良粘土+川砂(1~2mm大)	
21	SA2	+	小皿蓋			ナテ 丁寧なナテ	丁寧なナテ	外: 浅黄 内: 黄灰	やや精良粘土+粗-粗砂 (岩片?白-淡黄不透明。 1.5mm以下)	
22	SA2	+	複合 口縁 蓋?			横ナテ	斜ハケの後 ナテ	外: におい橙 内: におい橙・橙	やや精良粘土+細砂 中砂少。	

第4表 出土遺物観察表(1)

遺物番号	出土位置	種別	器種	流量 (cm)			器面調整		色調 (外面/内面)	胎土	特記事項
				口径	底径	器高	外面	内面			
23	SA 2	+	壺?				ハナナデ ハナナデ残ナデ 指押圧	堀いナデ	外: 灰褐 内: 明黄褐	やや精良粘土+中~粗砂 岩片(3~8mm)多。	
24	SA 2	+	壺				壺の残ナデ 残ナデ 残ナデ 残ナデ	風化激しい	外: にぶい黄褐 内: にぶい橙	やや精良粘土+細砂(微細) 多。赤褐色粒少。	
25	SA 2	+	甕又は鉢 (22S)				ナデ 堀いナデ	横ナデ	外内: にぶい黄橙	精良粘土+川砂(1~1.5mm 大、3~5mm少。) 金色黒雲 母片、黒色(黒曜石?)岩片	スス付着(外面)
26	SA 2	+	鉢 (12)				ナデ(一部 斜ナデ) 残ハケ	ナデの残、ハ ケによるナデ 上げ(下から)	外: にぶい黄褐・灰黄褐 内: 灰黄褐	やや精良粘土+川砂(1.5mm大、 5mm大も) 黒砂(角閃石? 粒舎) 黒色(黒曜石?)岩片	スス付着(外面) 炭化物付着(内面)
27	SA 2	土器	鉢				横ナデ 斜ナデ	横ナデ	外: 灰白 内: 灰白・浅黄	精良粘土+川砂(1.5mm前 後、3mm大も。)	
28	SA 2	+	高坏				横ハケの後 ナデ	口縁 面(右)にナ デかけ	外: 浅黄 内: にぶい黄橙	やや精良粘土+中~粗砂 (0.5~1.5mm)多。角閃 石片舎。	
29	SA 2	+	高坏				横ナデ 残ハケのナ デ	横ナデ	外: にぶい橙・暗灰黄 内: にぶい黄	やや粗質粘土+細砂(白~ 淡黄不透明)多。岩片(2 ~3mm大)	
30	SA 2	+	小壺				横ナデ 斜ハケの後 ナデ	横ナデ 指押圧	外: 灰褐 内: にぶい橙・灰褐	やや精良粘土+細砂(角閃 石片有。)	スス付着(外面)
31	SA 2 遺器	+	小壺				横ナデ	丁草ナナデ	外: 灰黄褐 内: 黄灰	30と同様の胎土。	
32	SA 2	土器 (片)	高坏				横ナデ 斜ハケ	斜、横ハケ	外: にぶい橙 内: にぶい黄橙	やや精良粘土+細砂(炭化物) 非常に多。角閃石片(1mm以下) 岩片(灰、白、1~2mm)ごく少。	黒斑(内面一部)
33	SA 2	土器 (片)	甕又は壺				ナデ 斜ナデ	風化激しい	外内: にぶい黄橙	32と同胎土。	割目目帯
34	SA 2	石器	磨製 石在丁	最大長 4.45	最大幅 9.0	最大厚 0.8	表面 斜、縦、横(刀 刃)の研磨痕	裏面 斜、縦(刃部)の 研磨痕	外: 灰・暗青灰		石材: 頁岩 重量: 42g 表面には厚さ約0.5mm、目的不明のこ の小く(鋭利な)穿孔(中道?)がある
35	SA 2	+	磨製 石斧	最大長 <4.3>	最大幅 <4.1>	最大厚 <1.1>	表面 縦、斜、縦、横方 向の研磨痕	裏面 斜、縦、横方 向の研磨痕	外内: 灰		石材: 頁岩 重量: <162g>
36	SA 2	+	磨石	最大長 8.5	最大幅 7.3	最大厚 4.2	表面(右) 斜、縦、横方向の研磨 痕(右)	裏面(左) 斜、縦、横方向の研磨 痕(左)	外内: 暗緑灰		石材: 結核岩 重量: 356g 側面にはほぼ全面敲打痕有り
37	SA 2	鉄器	鉄鏃	最大長 5.45	最大幅 (2.50)	最大厚 (3.15)					
38	SA 2	+	鉄形 金具?	最大長 2.0	最大幅 (0.70)	最大厚 (0.20)					
39	SA 2	+	鉄形 金具?	最大長 <1.6>	最大幅 (0.36)	最大厚 <3.4>					
40	SA 4	石器	白石	最大長 26.0	最大幅 17.7	最大厚 7.9	表面 使用面	裏面 使用面			石材: 花崗岩若か 重量: 6.0kg
41	SA 4	土器	壺	(8.1)			やや斜ハケ ナデ	ナデ	外: 黒 内: 灰	やや精良粘土+中砂多。 粗砂少。黒雲母片少。	スス付着(外面一部)
42	SA 4	石器	砥石	最大長 13.7	最大幅 6.2	最大厚 3.15	表面 研磨面	両側面 研磨面	外内: にぶい黄橙		石材: 巻石、重333.3g 裏面は、巻石を使った磨の痕跡が認められ、一面(研磨 面)は、左上隅には凸の研磨痕、下は凹の研磨痕が認めら れる。砥石の土器使用痕。
43	SA 5 西壁 上層	土器	壺	8.7			斜ハケ 縦ハケ ナデ	ナデ 指押圧	外内: 明黄褐	やや精良粘土(黒砂に混在)中砂、粗砂 (角閃石、片、粗砂)混在中多。赤 褐色岩片(1~3mm少、片、凹)粘土。 精良粘土+川砂(1~1.5mm 大) 黒色粒(輝石? 1.5mm 以下)少。	左上隅部(凹部)には磨の痕跡が認められ、 砥石の土器使用痕。
44	SA 5	土器	壺				横ナデ (リヤ使用?)	横ナデ	外: にぶい黄橙 内: 暗灰	精良粘土+川砂(1~1.5mm 以下)少。	スス付着(外面一部)
45	SA 7	土器	壺 (15.2)				横ナデ 指押圧	横ナデ 指押圧	外: 黒(スス)・浅黄 内: 浅黄	やや精良粘土+細砂~粗砂(1mm 以下) 粗砂少。角閃石片少。 黒曜石? 片舎。45に近似。	砥石付着 炭化物付着(内外面) 表面には凹の研磨痕が認められ、砥石の土器使用痕。 砥石による凹の研磨痕が認められる。
46	SA 7	土器	壺				横ナデ 縦・斜ハケ	横ナデ	外: にぶい赤褐 内: にぶい黄	やや精良粘土+細砂~粗砂(1mm 以下) 粗砂少。角閃石片少。 黒曜石? 片舎。45に近似。	スス付着(外面)
47	SA 7	土器	壺				横ナデ ハケ(左斜上) (右斜上)	横ナデ	外: にぶい黄橙 内: 明黄褐・にぶい黄橙	やや精良粘土+粗砂~岩片(白 ~灰半透明)角閃石・黒雲 母片や中多。(43-46に近似)	砥石付着 スス付着(外面一部)

第 5 表 出土土物観察表 (2)

遺物調査番号	出土位置	種別	器種	法量 (cm)			器面調整		色調 (外面/内面)	胎土	特記事項		
				口徑	底径	器高	外面	内面					
48	SA7	土器	甕		5.6			ナデ ハケ 指押圧	粗いナデ	外: 黒・灰黄褐色 内: 黒褐色(炭化物による)	やや精良粘土+川砂 (2~6mm大)	スス付着 (外面一部) 炭化物付着 (内面)	
49	SA7	土器	甕					横ナデ	斜ハケ?	外: 灰黄 内: 暗灰黄	やや精良粘土+細~中砂 粗砂少。角閃石(2~3mm)含。	刻み目突帯	
50	SA7	土器	甕						ハケ?	黒化著しい	外: 濁灰・橙 内: 黒褐色	粗A	スス付着 (外面一部) 炭化物付着 (内面)
51	SA7	土器	甕					横ハケ	ナデ	外: にぶい橙 内: 浅黄橙	精良粘土+川砂(1~4mm大)		
52	SA8	土器	甕 (119)					器の粗いナデ ハケ磨の痕	斜ナデの残 ナデ (右斜上)	外: にぶい橙 内: にぶい黄褐色	粗A' + 黒色(黒曜石?) 岩片(2~3mm大)ごく少。		
53	SA8	土器	小型 甕?					ナデ 指押圧	ナデ	外: にぶい黄橙 内: 浅黄橙	精良粘土+川砂(1~2mm大) 粗砂(黒色粒)含。	外面の表面には、手づくね成 形による細いひび割れが全体 に見られる。	
54	SA8	土器	甕					ナデ 横ナデ	丁寧なナデ	外内: にぶい赤褐色	粗A'	貼付突帯	
55	SA8	土器	甕					ナデ 工具による 横ナデ	ナデ 指押圧	外: 黄褐色 内: 灰黄褐色	粗A'	貼付突帯 スス付着 (外面一部)	
56	SA8	土器	甕					横ナデ	横ナデ	外: にぶい黄橙 内: 浅黄	43と近似胎土。赤褐色岩片 は、より大きい(2~8mm)。 67と同一胎土。同一個体か。	刻み目突帯 スス付着 (外面一部)	
57	SA8	鉄器	不明	最大長 <L>	最大幅 (1.6)	最大厚 (0.1)							表面内部には、水質礫化物と 思われるものも。木部に装着し て使用?
58	SA10	土器	小型 甕					縦方向の 工具ナデ	ナデ	外: にぶい黄橙 内: にぶい橙	粗A'	スス付着 (外面)	
59	SA10	土器	甕					タタキ	ナデ	外: 浅黄橙 内: 浅黄	精良粘土+川砂(1~4mm大) 黒色(黒曜石?)岩片(1.5 mm大)も有。	刻み目突帯 スス付着 (外面一部)	
60	SA10	土器	甕					ナデ 指押圧	ナデ 指押圧	外: 橙・黒褐色 内: 橙	粗A	貼付突帯	
61	SA10	土器	甕					ナデ	ナデ	外内: にぶい赤褐色	粗A'	スス付着 (外面) 工字突帯	
62	SA10	土器	甕					横ナデ	横ナデ 指押圧	外: 濁 内: 明褐色	粗A'	貼付突帯	
63	SA10	土器	甕					横ナデ	横ナデ	外内: 明褐色	粗A' 岩片1.5~3mm大、 ごく少。	貼付突帯	
64	SA11	土器	甕 (203)					横糸のナデ	横ナデ・ナデ	外: 黒褐色 内: にぶい濁	粗A	スス付着 (外面)	
65	SA11	土器	甕					横ナデ	ナデ	外: 灰褐色にぶい濁 62と近似。	粗A' 岩片やや多。 62と近似。	スス付着 (外面一部)	
66	SA11	土器	甕 (7.3)					縦、斜の ナデ	ハケの後ナデ	外: にぶい黄橙 内: 灰黄褐色	やや精良粘土+細~中砂 岩片(1.5~2.5mm大)少。	スス付着 (外面一部)	
67	SA11	土器	甕					斜ハケの 後ナデ	黒化著しい	外: にぶい黄橙 内: 明黄褐色	56と同一胎土。同一個体 か。	刻み目突帯	
68	SA11	土器	甕					ナデ	ナデ	外: にぶい橙 内: 橙	やや精良粘土+細~中砂 多。	口唇部刻み	
69	SA11	土器	高坏					縦、斜ハケ の後ナデ	指押圧 斜、横ナデ 一部工具使用	外内: 浅黄橙	やや精良粘土+細砂やや 多。角閃石小片(1mm以下) も有。		
70	SA11	石器	砥石	最大長 6.0	最大幅 2.25	最大厚 1.4	表面面 積・縦方向 の研磨痕		両側面 積・斜め方 向の研磨痕	外内: 浅黄橙		石材: 流紋岩、重さ: 27.5g 全面を砥石として使用している。 上面縁方、下面縁方(砂粒痕有り)	
71	SA11	石器	扁平 打製 石斧	最大長 <L>	最大幅 4.8	最大厚 0.8				外内: 緑灰		石材: 地質頁岩 重さ: <54.7g> 上面欠損	
72	SA10	石器	扁平 打製 石斧	最大長 6.08	最大幅 3.1	最大厚 0.65				外内: オリーブ灰		石材: 頁岩 重さ: 19.1g 下部欠損?	

第6表 出土遺物観察表(3)

遺物 番号	出土 位置	種 別	器 種	法量 (mm)			器面調整		色 調 (外面/内面)	胎 土	特 記 事 項
				口径	底径	器高	外面	内面			
73	SA10	石器	磨製石鏃	最大長 <L>	最大幅 1.45	最大厚 0.25	表面 磨・斜め方向の 研削による成形	裏面 磨・斜め方向の 研削による成形	外内：暗緑灰		石材：頁岩 重さ：<2.6g> 先端部欠損
74	I区 (SA3)	土器	甕	(26.3)			ナデ	横ナデ ナデ	外内：灰濁・にぶい橙	やや精良粘土+細砂多。 やや多孔質。	
75	II区	土器	甕				横ナデ ナデ	横ナデ ナデ	外：にぶい赤褐 内：にぶい褐	粗A+黒色(黒曜石?) 岩片(2~3mm大)ごく少。	工字突帯
76	II区 (SA5)	土器	盃	器高 (34~36)			横ナデ	横ナデ	外：黒褐 内：にぶい褐	粗A	外面色調はスの全体付着によるものか。
77	II区 (SA5)	土器	甕				横ナデ	横ナデ	外内：淡黄	精良粘土+川砂(0.5~1.5mm大)多。黒色(輝石?) 粒(0.5~1mm大)	顔み目突帯 顔み目内には、布様の圧痕有り
78	II区 (SA5)	土器	甕				ナデ 斜ハケ	斜ハケ	外内：にぶい黄橙	やや精良粘土+川砂(3~5mm大)少。白色粒(細~1.5mm)少。	ス付着(外面一部)
79	II区 (SA5)	土器	甕	器高 (6.9)			ナデ	ナデ 一部横方向 の工具痕	外：にぶい黄橙 内：にぶい黄	優良粘土+細砂(白色微細)多。岩片(灰~白半透明・ 淡黄、2~4mm大)	炭化物付着(内面)
80	II区 (SA5)	土器	甕				ナデ	ナデ	外：にぶい黄橙 内：橙	79と同一胎土	炭化物付着?(内面)
81	II区 (SA5)	土器	甕				陰ハケ (上方向)	横ナデ 横方向の沈痕	外：にぶい黄橙 内：黒	やや精良粘土+川砂 (2~4mm大)	内面色調は、炭化物付着によるものか。
82	II区 (SA5)	土器	甕				タタキ	ナデ	外内：淡黄	精良粘土+川砂(1~4mm大) 黒色(黒曜石?) 岩片(1.5mm大)も有。	
83	II区 (SA6)	土器	甕	(7.5)			ナデ	ナデ	外：にぶい黄褐 内：暗灰黄	粗A	
84	II区	土器	甕	11.8			横ナデ 粗い横ナデ	ハケ	外内：にぶい黄橙	やや精良粘土+中砂 角閃石類多。白色透明粒多。黒 色微細粒。岩片(3~4mm大)ごく少。	黒斑(外面一部) 器台部内面天井部には、雑物の細かい圧 痕(モミ?)が全所に認められる。器を使用か?
85	II区	土器	甕	(11.4)			陰ハケ 後ナデ ナデ	潤摩	外：にぶい黄橙・淡橙 内：褐灰	やや精良粘土+細~中砂 岩片(2mm大)ごく少。 角閃石・輝石? 粗片含。	
86	II区	石器	磨石	最大長 <L>	最大幅 10.0	最大厚 <S>	表面 磨面 磨打痕	裏面 ほぼ全磨面	外内：灰		石材：花崗閃石。重さ:<65.2g> 磨面に磨打痕有り。 左上側面及び表面に炭化物付着
87	II区	石器	磨製石鏃	最大長 3.9	最大幅 1.6	最大厚 0.29	表面 磨・斜め方向の 研削による成形	裏面 磨・斜め方向の 研削による成形	外内：オリーブ灰		石材：頁岩(粘板岩) 裏面下部には擦痕有り。 矢羽裏面がかなり傷み割割不可
88	II区 (SA6)	石器	扁平打製石斧	最大長 7.7	最大幅 3.5	最大厚 0.65	表面 中央は磨面 での剥離面		外内：灰		石材：頁岩 重さ：25.5g 上端部は折損?
89	I区	鉄器	鉄鏃	最大長 <SD>	最大幅 (2.05)	最大厚 <SD>					
90	I区	鉄器	鉄鏃	最大長 <SD>	最大幅 (1.35)	最大厚 <SD>					
91	SA6	土師器	甕				ナデ 指押圧	上・斜ケズリ	外：にぶい橙 内：にぶい黄褐	精良粘土+川砂(1mm前後)	
92	SA6	土師器	甕				横ハケ	ナデ	外内：淡黄橙	やや精良粘土(マール状腐 有)+川砂(0.5~2mm大) 黒 色(輝石?)粒。雲母片含。	
93	SA6	土師器 (片断)	埴輪	(13.6 ~ 16.2)			ナデ	ナデ	外内：橙	精良	
94	SA6	土師器	甕	24.34		26.6	ナデ 工具による横ナデ ハケによる横ナデ	工具による横ナデ ナデ・指押圧	外：橙 内：にぶい橙	粗A	ス付着(外面一部)
95	SA6	埴輪器	埴	(15.4)			ロクロナデ	ロクロナデ	外内：灰白	精良粘土+細砂(白)	
96	SA6	埴輪器	埴	(14)			ロクロナデ	ロクロナデ	外：灰 内：灰白	精良粘土+細砂(白)ごく 少。粗砂ごく少。	
97	SA6	埴輪器	高台付埴	(10.7)			横ナデ ナデ	ロクロナデの 後ハケ状のもの で一部ナデ	外：灰白・灰 内：灰白	精良粘土+中砂(白)少。	高台内面に坏底部との接合時の へう先端による連続する強い 圧痕が見られる。

第7表 出土遺物観察表(4)

遺物 番号	出土 位置	種 別	器 種	法量 (cm)			器 面 調 整		色 調 (外面/内面)	胎 土	特 記 事 項
				口径	底径	器高	外面	内面			
98	SA 6	甕形器	壺	(11.0)			横ナア 横ナア	ロクロナア	外内: 灰	精良粘土+細砂多と粗砂 岩片(白、3mm大)ごく少。	外面の工具による縦状線痕の 痕なりは強印か。 底部に縄状のものに圧痕有り。
99	SA 6	甕形器	甕				前の方向の平行 ナア、斜ナア 方の平行ナア	同心円の あて具痕	外内: 灰	精良粘土+中砂(白)ごく 少。	
100	SA 6	甕形器	甕				斜・横平 行 タタキ	同心円の あて具痕	外内: 灰	精良粘土+細砂(白、白半透 明、淡黄)多。中砂少。粗 砂ごく少。107と同一個体か。	
101	SA 6	鉄器	鉄鏃	最大長 <L>	最大幅 <L2>	最大厚 <D2>					
102	SA 6	鉄器	棒状 鉄器	最大長 <L>	最大幅 <D2>	最大厚 <D2>					
103	SA 9	鉄器	鉤状 鉄器	最大長 <L2>	最大幅 <D2>	最大厚 <D3>					
104	SA 9	鉄器	棒状 鉄器	最大長 <L2>	最大幅 <D2>	最大厚 <D2>					
105	SA 9	甕形器	坏(壺)	(15.4)			横ナア	横ナア	外: 灰白・黄灰 内: 灰	精良だが焼成・焼きしまり 不良。	
106	SA 9	甕形器	高台 付坏	(13.2)			ロクロナア	ロクロナア の後ナア	外: オリーブ黒・灰 内: 灰	精良粘土+細砂ごく少。	
107	SA 9	甕形器	坏	(7.0)			ナア ヘラ切り底	ロクロナア	外内: 灰白	精良粘土+岩片(白色、1 mm前後、3mm大)	
108	SA 9	甕形器	高台 付坏	(7.6)			ロクロナア・ナア ヘラ切り後 ロクロナア	横ナア 不定方向の ナア	外内: 灰	精良粘土+細砂(白、白半 透明、淡黄)少。粗砂(黒・ 灰)ごく少。	
109	SA 9	甕形器	高台 付坏	(6.7)			横ナア・ナア、 斜めヘラ状 工具? 痕	横ナア・ナア	外内: 灰	精良粘土+細砂少。 粗砂(白・淡黄)ごく少。	
110	SA 9	甕形器	壺				ナア 細いナズリ	ロクロナア	外: 暗青灰 内: 黄灰	精良粘土+岩片(白)多。 中砂少。岩片(5mm大)ごく 少。	110-111は同一個体
111	SA 9	甕形器	壺	(10.7)			ヘラケズリ ヘラ切り底	ナア	外内: 灰	110と同一個体。	
112	SA 9	甕形器	坏 (調子)	(16.8)			ヘラ状の工具? を用いたロク ロナア	ロクロナア	外内: 灰黄	精良。灰・白のマーブル状 の縞模様有。	
113	II区	甕形器	壺				横ナア	ロクロナア	外: 灰オリーブ・灰 内: 灰	精良粘土+白色粒(0.5mm 以下)非常に多。	2破片を合成して図上で復元
114	SA 9	甕形器	壺	(9.4)			ナア	ロクロナア 底部: ナア	外: 黄灰・灰 内: 黄灰	精良粘土+細～粗砂少。 岩片(3-6mm大)少。	底部外面の高台端部に布圧痕 有り
115	SA 9	甕形器	壺	(10.2)			ナア 横ナア 横ナア	横ナア 底部内面は不 うすい自然焼 定方向のナア	外: 灰白 輪: 灰色 内: 灰白	精良粘土+細砂 粗砂(白・淡黄)ごく少。	
116	SA 9 上手	甕形器	甕				棒目タタキ ナア 自然焼?	横ナア	外: に近い赤褐 内: 淡黄褐	やや精良(紋状の溶解した 不純物多)。	
117	SA 9	甕形器	甕				棒目タタキ	同心円文タ タキか	外: 灰黄 内: に近い黄	精良だが焼成・焼きしまり 不良。	
118	SA 9	土師器	坏	(16.2)	(10.4)	3.25	ナア	横ナア	外: 橙 内: 淡黄橙	精良粘土+細～粗砂(1.5 mm以下) 金色黒雲母片少。	
119	SA 9	土師器	坏	(14.2)	(9.6)	4.25	ナア	ナア	外内: 灰白	精良	炭化物付着(内面一部) スス付着(外面一部)
120	SA 9	土師器	坏	(7.2)			表面風化の 為不明	表面風化の 為不明	外: 灰白・黄灰 内: 淡黄橙・灰白	やや精良粘土+川砂(細～ 1.5mm大)多。川砂(2-4 mm大)少。	
121	SA 9	土師器	坏	(7.7)			ナア	ナア	外内: 橙	やや精良粘土+細砂	
122	SA 9	土師器	甕				ナア	ナア	外: に近い黄橙 内: に近い褐	精良粘土+川砂(1-2mm) 川砂(3-6mm) 少。金色 黒雲母片ごく少。	スス付着(外面)

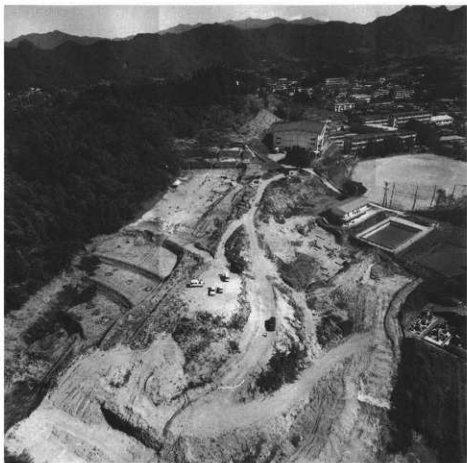
第8表 出土遺物観察表(5)

遺跡番号	出土位置	種別	器種	法量 (cm)			器面調整		色調 (外面/内面)	胎土	特記事項
				口径	底径	器高	外面	内面			
123	SA 9	土師器	甕				ナテ	ナテ	外: 灰黄褐色 内: ぶい黄褐色	やや精良粘土+細砂(角閃石片含)多。	
124	SA 9	土師器	甕				横ナテ	横ナテ	外: ぶい黄褐色 内: 橙	123と同様。	
125	SA 9	土師器	甕				ナテ 横ナテ	横ナテ	外: ぶい橙 内: ぶい黄褐色	やや精良粘土+川砂(1.5mm前後)と黒色(輝石?)粒(0.5-1mm大)	
126	SA 9	土師器	甕 [16.0前後]				横ナテ	横ナテ	外: ぶい橙 内: ぶい黄褐色	やや精良粘土+川砂(0.5-1.5mm大)多。細砂(黄褐色粒含)、金色黒雲母片、黒色(輝石?)片多	
127	SA 9	土師器	甕				横ナテ 新ハケ	横ナテ ナテ	外: ぶい赤褐色 内: 灰褐色	精良粘土+白色細砂やや。角閃石片、岩片(白-灰-褐色、1-2mm大)、曇りまじり粒状物多	
128	SA 9	土師器	甕				縦ハケ	ナテ	外内: ぶい褐色	粗質粘土+白色細砂やや多と岩片(白-灰-褐色、1-6mm大)	
129	SA 9	土師器	甕				ハケ(上)	ナテ	外: ぶい黄褐色-黒褐色 内: ぶい褐色-黒褐色	128と同土。	スス付着(外面一部) 内面黒変部分は炭化物由来?
130	SA 9	土師器	甕				新ハケ	ナテ	外: ぶい橙 内: ぶい赤褐色	128と同様。岩片やや少。	
131	SA 9	土師器	甕				風化著しい ナテ?	風化著しい ナテ?	外: 浅黄褐色 内: ぶい黄褐色	精良粘土+川砂(0.5-1.5mm大)多。細砂(黄褐色粒含)少。金色黒雲母片含。	
132	SA 9	土師器	甕				ナテ-工具痕	横ナテ、削り	外: 暗灰黄 内: ぶい黄褐色	やや精良粘土+細砂やや多。中砂少。角閃石片含。	
133	SA 9	土師器	甕 (190)				横ナテ 器底部分に 器高ナテ?	横ナテ	外: 黒褐色 内: ぶい黄褐色	やや精良粘土+中-粗砂(0.5-2mm大)多。粗砂(2-3mm大)ごく少。	スス付着(内面口縁部、外面)
134	SA 9	土師器	甕				ナテ	斜め上方向 のケズリ	外: ぶい黄褐色 内: ぶい黄褐色	粗A	
135	SA 9	土師器	甕				粗いナテ 下半に多くの 砂粒付着	粗いナテ	外: ぶい黄褐色 内: ぶい褐色	やや精良粘土+中-粗砂(0.5-2mm大)多。	スス付着(外面一部) 器底部分に器高ナテらしき 器高ナテらしき器高ナテらしき
136	II 区	須恵器	坏蓋 (124)				ヘラケズリ 横ナテ	横ナテ	外: 灰-オリーブ黒 内: 灰白	精良粘土+微細砂多。 粗砂(白、淡黄)ごく少。	
137	II 区	須恵器	坏蓋 (142)				天井部-ナテ 口辺部-ナテ 口唇部-ナテ 口唇部に沈着	天井部-ナテ 口辺部-ナテ 口唇部-ナテ 口唇部に沈着	外: 灰白 自然釉: 灰オリーブ 内: 灰白	精良粘土+細砂(白)ごく少。 粗砂ごく少。	口唇部及び外面口辺部にうすく自然釉が分かる。 ヘラケズリらしき器高ナテらしき
138	II 区	須恵器	坏蓋 (127)				上唇部ケズリ (横ナテ?) 横ナテ	横ナテ	外: 灰白 内: 灰白	精良粘土+細砂(白、透明物)多。 中砂ごく少。岩片ごく少。	天井部の古い沈着物の凹みはケズリ時の砂粒の動きによるものか。
139	II 区	須恵器	高台付坏	6.5			ナテ ナテ	ナテ	外内: 灰	精良粘土+細砂と粗砂	
140	II 区	須恵器	高台付坏	(8.4)			横ナテ ナテ	横ナテ ナテ	外: 灰黄-灰 内: 浅黄	ややシルト質粘土+細砂曇りまじり不良。	
141	II 区	須恵器	高台付坏	(7.7)			横ナテ、ナテ 器底部分に 器高ナテ?	ナテ	外内: 灰	精良粘土+細砂少。 粗砂(白、淡黄)ごく少。	
142	II 区	須恵器	蓋?				ナテ? (風化著しい)	ナテ?	外内: 灰白	やや精良粘土+細砂、中砂(白)ごく少。灰・白のマーガロ状物有。曇りまじり不良。	
143	II 区 (SAND)	須恵器	坏蓋				ナテ 器周囲ケズリ	ナテ	外内: 灰	精良粘土+細砂(白、透明物)少。	
144	II 区	須恵器	甕				新めハケの 後横ナテ	横ナテ	外内: 灰	精良粘土+細-中砂岩片(灰、3mm大)ごく少。	外面に工具端部圧痕有り
145	II 区	土師器	坏蓋				ヘラケズリ	横ナテ	外内: ぶい橙	精良粘土+微細砂(角閃石片含)。	
146	II 区	須恵器	坏	(6.8)			横ナテ ヘラケズリ 器底部分に 器高ナテ?	ロクロナテ	外内: 橙	精良粘土+微細砂 胎土は灰色。須恵器・土師器の中間的。	
147	II 区	土師器	坏蓋	(7.9)			風化の為 調整不明 ヘラ切り	風化の為 調整不明	外: 浅黄褐色 内: 浅黄褐色-ぶい橙	精良粘土+赤化した凝結凝結(1.5mm以下)ごく少。	

第9表 出土遺物観察表(6)

遺物 図号	出土 位置	種 別	器 種	法量 (cm)			器 面 調 整		色 調 (外面/内面)	胎 土	特 記 事 項
				口徑	底徑	器高	外面	内面			
148	II区	土器	坏	(9.5)			ナデ? (全身に黄褐色の ヘラ切り)	ナデ? (全身に黄褐色)	外: 黄褐色 内: 黄褐色	精良粘土+赤化した焼鉄 磁粒(1.5mm以下)ごく少。 焼きしまり不良。	
149	II区	土器	坏	(9.1)			風化著しい ナデ?	ロクロナデ	外内: 浅黄褐色	精良粘土+川砂(0.5mm~1. 5mm大)多。黒色(輝石?) 粒(1mm以下)	
150	II区	土器	不明	(11.0)			風化の為調 整不明 ナデ?	風化の為調 整不明 ナデ?	外: にぶい橙 内: 橙	シルト質粘土+川砂(1.5mm 大)少。川砂(4~6mm大)こ く少。	黒面(外面一部)
151	II区	土器 (片断)	高台 付坏	(7.8)			横ナデ ナデ	ナデ	外: 橙 内: 黄褐色	やや精良粘土+細砂。粗 砂少。岩片(5mm大)ごく 少。角閃石・黒雲母片少。	
152	III区	土器	甕				横ナデ	横ナデ	外内: にぶい黄褐色	やや精良粘土+細砂やや 多。中砂少。 川砂(1~2mm大)少。	
153	II区	土器	甕				横ナデ ナデ	横ナデ ナデ	外: 橙 内: 橙・灰黄褐色	やや精良粘土+中~粗砂 (0.5~1.5mm大)多。 粗砂(2~3mm大)ごく少。	
154	SC7	土器	甕				横ナデ 縦ハケ	横ハケ 斜ハケ	外: にぶい橙 内: にぶい黄褐色	粗A 焼きしまり良。	
155	SC7	土器	小型甕				横ハケ後ナ デ?	縦いナデ	外: 浅黄褐色・灰黄褐色 内: 浅黄褐色	精良粘土+川砂(1~4mm大)	
156	SC7	土器	甕				ナデ	ナデ 縦いナデ	外: にぶい黄褐色 内: にぶい黄褐色	やや精良粘土+細砂やや 多。中砂少。角閃石片含。 微細透明粒多。	
157	II区	土器	甕				平行タタキ	同心円タタキ	外: 黒褐色 内: 黒灰	精良粘土+細砂(白、白半透 明、洗黄)多。中砂少。粗 砂ごく少。100と同一個体か。	
158	II区	土器	甕				格子目タタキ	同心円タタキ	外: にぶい褐 内: 黄灰	やや精良(粒状の溶解した 不純物多。)	
159	II区 (5A10)	土器	甕				格子目タタキ	同心円の出 具裏	外: 灰 内: 灰白	やや精良粘土+粗砂多。	
160	II区	土器	甕				平行タタキ・ 自然釉	平行タタキ	外: 自然釉・灰オリーブ 内: 浅黄褐色	やや精良粘土+白色岩片 (5mm大)ごく少。 粒状の溶解した不純物多。	
161	SA9	土器	布衣 土器				風化気味 ナデか	布衣	外: 浅黄褐色 内: 浅黄褐色	やや精良粘土+細砂(黒色 粒多)多と川砂(1.5~2.5mm 大)	
162	SA9	土器	布衣 土器				ナデ	布衣	外内: 橙	やや精良粘土+川砂(1.5 ~2.5mm大)	
163	II区	土器	布衣 土器				17区とのA45 指押え ナデ	布衣	外内: 黄褐色	やや精良	
164	SA3	土器	甕 (33.3)				横ナデ 指押圧	横ナデ 指押圧	外: 黄褐色・明黄褐色 内: にぶい褐・灰褐色	粗A	スス付着(内・外面)
165	SA3	土器	甕 (28.1)				ナデ	横ナデ ナデ 指押圧	外内: にぶい黄褐色・黒褐色	粗A	スス付着(内面一部・外面)
166	SA3	土器	甕				縦・斜ナデ	ナデ	外: 粗灰 内: 黒(炭化物による)	粗A' 無色透明粒多。	白色物付着(外面)。前面粘 土色黄は暗褐色。炭化物付着 (内面)。スス付着(外面一部)
167	SA3	土器	壺				横ナデ	ナデ 指押圧	外: にぶい赤褐色 内: にぶい褐	粗A'	貼付片着
168	SZ2	土器	甕 (23.5)				横・斜ナデ	横ナデ 指押圧	外内: にぶい黄褐色	粗A	スス付着(外面)
169	SZ2	土器	甕				横方向のナデ	横ナデ 指押圧	外: 灰黄褐色 内: にぶい橙	粗A	スス付着(外面)
170	SZ2	土器	甕				横ナデ	ナデ 指押圧	外: 黒褐色 内: にぶい橙・灰黄褐色	粗A	スス付着(外面)
171	SZ2	土器	甕				横ナデ	ナデ	外内: にぶい橙	粗A'	断面粘土色調は黒色
172	SZ2	土器	甕又 は壺				丁寧なナデ	横ナデ	外: にぶい橙 内: 灰黄褐色	やや精良粘土+川砂(1~4mm大 1.5mm前後多)。焼きしまり良。 10と同一器土質一器体少。	

第10表 出土遺物観察表(7)



神殿遺跡A地区全景（上空南西から）



神殿遺跡I・II区



調査開始時の状況

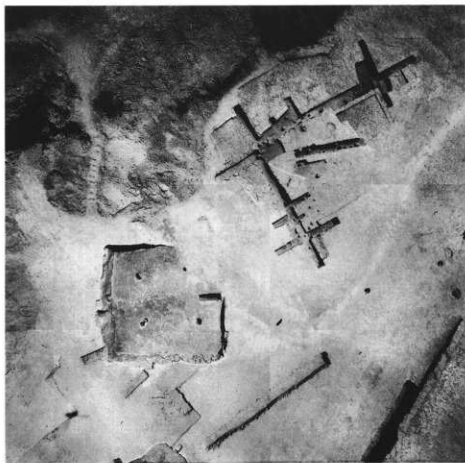
← 北 (淡路城付近) から

↓ 南西から淡路城跡を望む



神殿遺跡基本土層

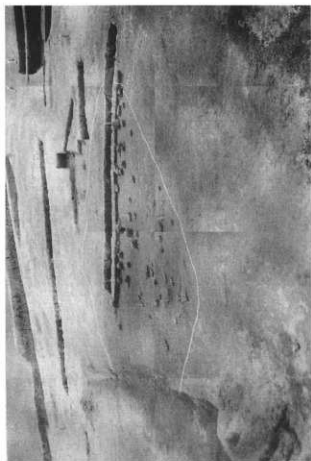
(B区トレンチT2断面)



神奈川遺跡A地区-I区 遺構近景 (上空から)



I区 発掘作業風景 (SZ1~3, SA3)



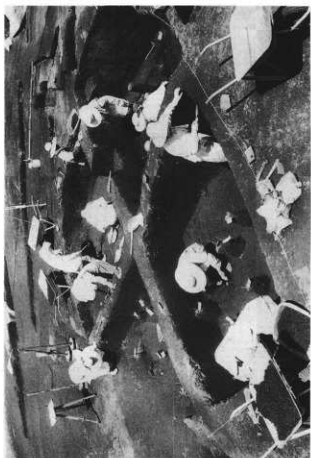
SA2 遺構検出状況 (東から)



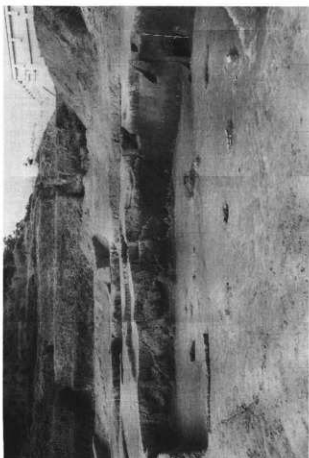
SA2 遺構完照状況 (東から)



SA2 住居の大きさ (人との対比)



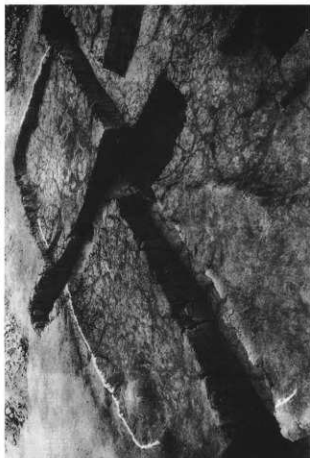
SA2 遺構掘り下げ状況



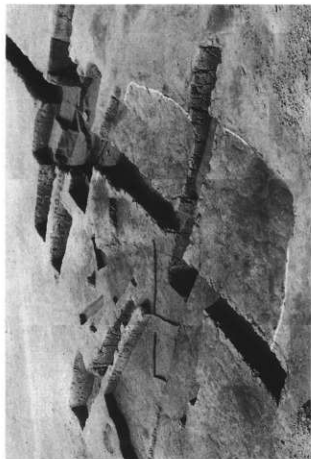
SA2 遺構完照状況 (南から)



SA 3 遺物出土状況 (西から)



SZ 2・3 遺構近景 (西から)



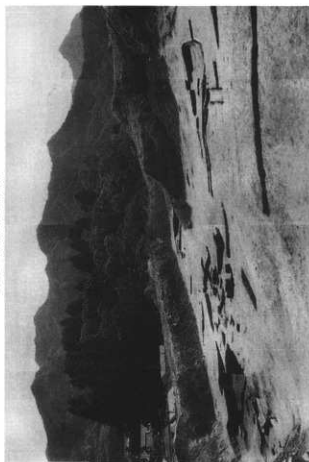
SZ 2・3、SA 3 遺構の状況 (東から)



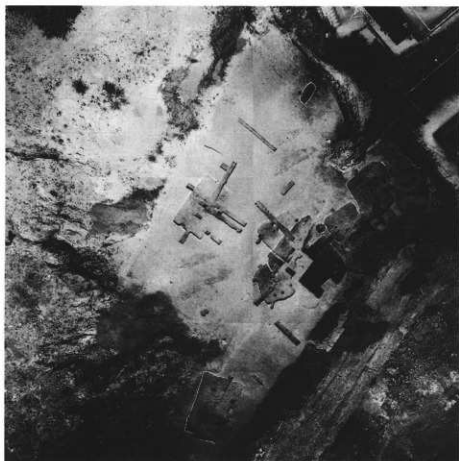
SA 3 埋土の状況 (北から)



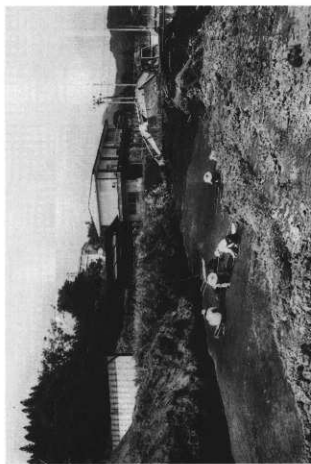
II区 調査前の状況



II区 全景 (東から)



神威遺跡A地区- II区 全景 (上空から)



II区 下段 試験の状況 (南西から)



SA 4、SA 5、SC 6 選構検出状況
(西から)



II区 発振作業状況 (西から)



SA 5 遺物出土状況 (北西から)



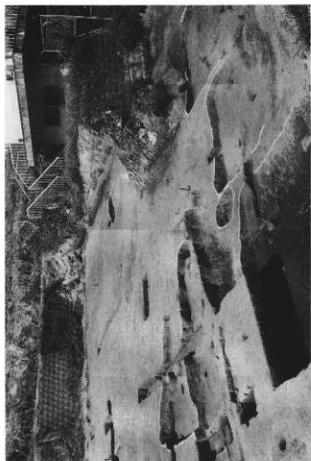
SA 5 遺構完照状況 (南から)



SA 4 遺物出土状況 (西から)



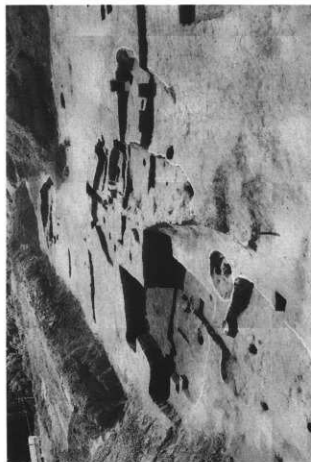
SA 4 遺構完照状況 (南から)



II区 住居群 (東半部、南西から)



II区 SA6、SA7 遺物出土状況 (東から)



II区 住居群 (東から)



II区 SA6~8 遺物出土状況 (西から)



II区 SA6 遺物出土状況 (北から)



II区 SA9 埋土堆積状況 (南から)



II区 SA6~9 遺構近景 (南から)



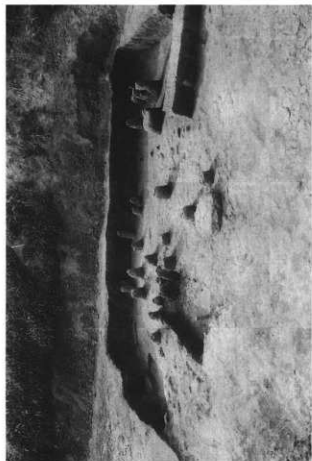
II区 発掘作業風景



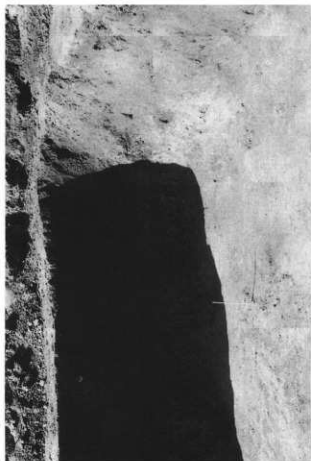
II区 SC7 遺物出土状況



SC6 阿蘇溶結凝灰岩出土状況(北から)



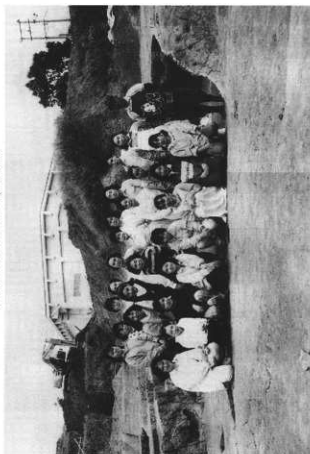
II区 SA10 遺物出土状況(南から)



II区 SA10 鏡片出土状況(竹単位置床面直上)



社会科授業での遺跡説明会



神籠遺跡 発掘作業員のみなさん



II区出土 突帯文土器



II区出土 縄文晩期土器

弥生時代の土器



2



168



19



45



48



47